第４１回鹿児島県漁村青壮年婦人グループ活動実績発表大会資料

平成７年１月１３日

於　　鹿児島市民文化ホール

会　次　第

1　開　会　　　　　　　　　　　　　　　　　　１２：３０

2　日程説明

3　活動実績発表

（1）　垂水市漁協婦人部　　　　和 田イツ子

（2）　屋久町漁協あゆみグループ　箕 作 順 二

（3）　かいゑい漁協青壮年部　　坂 元 茂 教

（4）　江口漁協青年部　　　　　西 田 良 一

（5）　黒之浜漁協青年部　　　　福 浦 三 則

（6）　志布志漁業協同組合　　　丸 山 雅 英

（7）　名瀬漁協青壮年部　　　　瀧 田 和 幸

※　１人につき１８分（発表１３分，質問５分）

4　寸　劇
「資源管理型漁業への取組」　　　　　　　　１４：４５

（抽　選　会）

5　審査員結果報告　　　　　　　　　　　　　１５：４０

6　感謝状及び記念品授与

7　閉会のことば

8　万歳三唱

9　閉　会　　　　　　　　　　　　　　　　　１６：００

審査員

鹿児島大学水産学部教授	税所 俊郎
鹿児島県漁業協同組合連合会専務理事	中村 幸雄
鹿児島県漁業協同組合連合会専務理事	柴 貞雄
鹿児島県信用漁業協同組合連合会専務理事	福留 正志
鹿児島県林務水産部次長	三木 修一
鹿児島県林務水産部林務水産課長	又木 紘
鹿児島県林務水産部水産振興課長	塩満 暁洋
鹿児島県水産試験場長	荒牧 孝行
鹿児島県農政部経営技術課生活改良専門技術員	徳田 和子

目　次

○　明日の豊かな漁業をめざして　……　1
　　――　健康管理に取り組んで　――

　　垂水市漁協婦人部　和田イツ子

○　シマアジ飼付け漁業に取り組んで　……　9

　　屋久町漁協あゆみグループ　簑作　順二

○　海づくり・魚づくり・人づくり　……　16
　　――　青壮年部活動を通して　――

　　かいゑい漁協青壮年部　坂元　茂教

○　活気ある我らが漁協青年部　……　24

　　江口漁協青年部　西田　良一

○　「とうちゃん，こん魚はなんけ？」　……　32
　　――　ヒラメ生餌一本釣りに取り組んで　――

　　黒之浜漁協青年部　福浦　三則

○　小型底曳網漁具の改良に取り組んで　……　39

　　志布志漁業協同組合　丸山　雅英

○　明日を担う青壮年部活動　……　48

　　名瀬漁協青壮年部　瀧田　和幸

明日の豊かな漁業をめざして
－健康管理に取り組んで－

垂水市漁協婦人部　　和田イツ子

1　地域及び漁業の概況

私達の垂水市は、大隅半島の西北部鹿児島湾に面するほぼ中央にあり、鹿児島市と大隅地域とを結ぶ海上・陸上交通の要に位置しております。
気候は、年間平均で２０．４度と温暖で、面積は１６２．６３㎢、海岸線が長く３７㎞におよんでおります。

垂水市には２つの漁協があります。鹿児島湾中央部の桜島と接する北側にあるのが牛根漁協で，南側にあるのが私達の垂水市漁協です。

垂水市漁協の平成５年度末現在の組合員数は、正組合員４７０名、准組合員２７２名、合計７４２名で、主な漁業種類として魚類養殖・小型まき網・小型底びき網・刺し網・一本釣・延縄・定置網等が営まれており，平成５年度の水揚量は６千２５トン，５９億８百５５万円でした。特に養殖業の比重が大きく，地域における基幹産業としても重要な位置を占めております。昭和３５年に県内初の小割式イケス魚類養殖が行われて以来，幾多の災害・経営危機をも乗り越えてきております。

特に、平成元年７月の台風１１号では壊滅的な被害が発生し、復旧に向けて婦人部員も炊き出し等の作業におわれ必死でした。
「天災は忘れた頃にやってくる」といいますが、自然の力、自然の怖さを改めて痛感しあの時の教訓を糧として、恵まれた自然環境を十分配慮しながら母なる海を大切にしてハマチ・ブリ等の養殖「日本一」をめざしたいと考えております。

2　組織の概況と運営

私達の婦人部は昭和３７年４月に結成され、今年で３２年目になります。
現在、部員は１５５名で部長１名、副部長１名、書記１名、会計１名、監事２名、班長１９名の役員が中心になって、活動に取り組んでおります。

日頃より婦人の地位向上はもちろんのこと漁協との連携を強め「明るく豊かな漁村づくり」をめざして実践活動に励んでおります。

明るいニュースが途絶えがちな中で、今こそ浜の婦人が手と手を取り合い、更に皆の力を結集してがんばらなければならないと思います。

主な活動内容は、健康管理活動・魚食普及・生命と海と自然環境を守るために天然せっけん普及運動・貯蓄推進に努め、積極的に学習会、浜清掃等に取り組み活発な婦人部活動を展開しております。その中でも私達婦人部は、健康問題を重点活動項目として永年取り組んで参りました。

3　活動の動機

私達の漁協は、養殖業に従事する人が大部分を占めております。ハマチ養殖に従事する私達は、労働時間が不規則なため健康を損ないやすい生活環境にありましたが、自分たちの健康管理にはほとんど無関心な人が大半でした。

特に４月～７月にかけてのモジャコ時期は、朝４時から夕方６時頃までの作業が、また年末ピークを迎える出荷時期には、市場のせりの関係から冬の朝４時から作業に従事せざるを得ません。このため、食生活もついつい不規則にならざるを得ない実情です。

しかし、昭和５６年から始まった組合員の健康診断の結果で、３０代から肥満・高脂血症・肝臓病が多いという指摘を受けました。このままではこれからの漁業を担う人々の健康は守れないという危機感から、婦人部が中心になって市衛生課や健診機関、普及所の協力を得て「健康づくり活動」に取組み、以来１４年間私達の婦人部活動の重点活動項目として実施しております。

4　実践活動の状況

「漁業経営の安定と漁村の発展はまず健康づくりから」とのキャッチフレーズを掲げ、昭和５６年から定期的な健康診断を始めました。当初は受診者が少なく、とても苦労されたそうです。このため、健康診断の意義について講師を呼んで学習会を開き、又、健康診断の日は餌止めするなど受診しやすい環境づくりに努めました。さらに婦人部の班長は、各班を巡回し、一人でも多くの人が受診出来るよう地道な活動に取組みました。

市衛生課が昭和５７年度に実施した「ハマチ養殖漁業従事者生活実態調査」では、

1　作業時間が午前６時～１１時で一日二食主義の人が多い。

2　甘い菓子・パン・清涼飲料水等を間食に食べる人が多い。

3　調査対象の６割の人が野菜の摂取が不足しているなど食事のバランスがとれていない。

という結果が出されました。漁協婦人部では、この結果をもとに健康づくりについての意識を高めてもらうために話し合いを行い、定期健康診断に併せて健康教室を開き、実行することとしました。

ここで、昭和６０年に始まった健康教室のひとコマを紹介します。

まず、健康診断の結果について保健婦さんから説明を受けたところ、自分たちの食生活を改める必要があることを知り、話し合いました。すると「何をどれだけ食べたらよいか分からない。」という人もいました。そこで、栄養士を招いて理想的な栄養の取り方を学習しました。例えば８０キロカロリーの食品は野菜ではこれくらい、お菓子ジュース等実物を手にとって見たり一人一人の必要な栄養所要量を計算し、自分の献立に直してならべました。皆、量が少ないことにびっくりしたり、野菜の摂り方が少ないことをあらためて実感しました。

次に栄養についての学習では、食べたエネルギーを体を動かして使うことが大切なことをお教わり

ました。
市が行う「３００キロカロリーチャレンジ事業」との合同学習会でストレッチ体操をした後、カロリーカウンターを付けて８０キロカロリー消耗するために歩行をしてみました。「どの位運動すればよいか。」の体験学習です。歩けども歩けどもカウンターは微量しか増加せず、「こひっこ歩んでんこげなもんかね。まこて痩せんもんじゃねー。」と思うことでした。皆、動いて痩せるのは至難の技と悟ったようです。また、食事を徹底分析して食べる量や食べる内容を検討する必要があることを一同痛感いたしました。「病は口から」という言葉がありますが、ほんとうにその通りだったのです。

このようなことから、健康を守るために私達は、地域全体の食生活習慣を改めるよう皆で話し合うことになりました。グループ同志で話し合うと多くの問題が出てきます。例えば、①自分の家に来客があった時お茶だけですますのは相手に失礼にあたる。何もださないとケチだと思われそうだ。
とのことから、お菓子や甘い飲み物でもてなすことになりがちでした。②逆に訪問先で出されたものを食べないと失礼になる。③更に嫁が姑に甘い物を制限することは角がたつとの意見もありました。
このようなことは、皆が協力して地域ぐるみで解決していかなければならないということで、お茶菓子を出さない運動や缶ジュースを麦茶や牛乳に変えようと話し合いました。

また、健康を維持するには運動が大切とのことから、グランドゴルフ大会をはじめました。今では恒例の行事になったグランドゴルフ大会は、部員のストレス解消と親睦を深めること、それに健康づくりという多くの目標を掲げて実施しているものです。

桜島の見えるグランドで珍プレー好プレー、ホールインワンなどの大歓声が湧き大変にぎやかです。
婦人部では、自分たちでそろえたグランドゴルフ用具で練習しており、大会の日はその成果が発揮される日です。

また、グランドゴルフに接することから、日頃車ばかり利用している生活の中で、徐々に歩く習慣が身につきました。

一方、食生活においても学習会を開き、魚料理のアイディア紹介や魚にはＤＨＡという成分が動脈硬化や脳の老化を防ぐということなどを勉強しています。

今後とも魚料理講習会の開催を増やし、より一層の魚食普及にも努めていきたいと思っております。

このように、健康問題については、いろいろな方法を取り入れて取り組んでおります。

まず、毎年婦人部員からの意見を求め、１年間の計画を立てて実施しております。１年間の学習内容は別表３のとおりです。
以上が、私達婦人部の取り組んでいる健康問題に係わる活動内容です。

5　活動の成果

昭和５６年頃、健康診断が始まったばかりの頃は、健康に対する関心は高くありませんでしたが、健康診断や健康教室等を定期的にするようになり年々高まってきました。自分の健康診断の結果についても理解が深まるにつれて、『コレステロールの善玉が低いからまだ運動がたりない。』等という会話が浜で交わされるようになり、健康問題への意識の高まりを感じています。

次に健康診断の受診者は表４のとおり徐々に増加してきております。
地域ぐるみで検診日だけは餌止めし多くの人が受診できるように協力を得たことや、婦人部の積極的な活動が実って徐々に受診者数を増加させることが出来ました。

Ｕターンして漁業に従事する人や、後継者の人たちも定期的な健康診断を受診し、次代の漁業を担う一家の大黒柱の健康管理に役だっています。
また、グランドゴルフやウォーキング等のスポーツやレクレーションを取り入れた健康づくりにも関心が高まってきております。朝夕に海岸を歩いている人、グランドゴルフ同好会でナイター練習をしている人などをみかけると、私達の地道な活動が生活の中に浸透してきているように思います。

最近の健康診断の結果によると、昭和５６年に健康診断を開催した当初の頃に比較して、全体的に高脂血症の人、肝臓の悪い人、肥満の人がやや低下してきており徐々に改善の兆しがみられます。

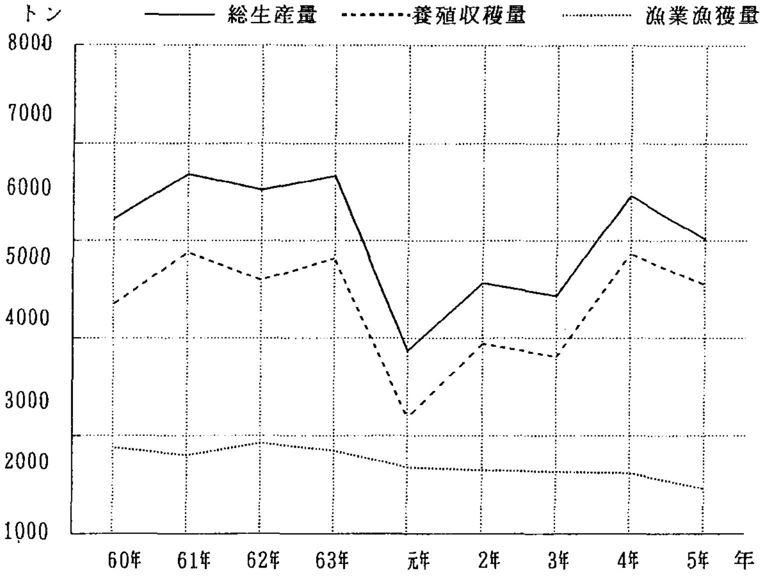
6　今後の計画・問題点

まず、これまで一つ一つの積み重ねによって生まれた婦人部活動を、地域に密着した運動として展開することです。健康で明るい漁村づくりを目指すには、婦人部を通して若い母親等も積極的に活動に参加してもらって、次の世代のリーダーとして育成してゆく必要があります。

また魚食普及に関しても、魚の成分には成人病予防につながるＥＰＡ・ＤＨＡというものがあることをＰＲし、若い人達にも好まれる多くのアイデア料理を紹介していきたいと思っています。

私達婦人部の目標である「健康管理活動」は、家族の健康を預かる主婦が先ず食生活を改善し、健康づくりに努めることです。このためにはあらゆる勉強会や健康診断等にも積極的に参加して私達主婦がまず健康で、又世界にも目を向ける広い心や視野をもって家族の健康管理をしてゆくことが家族の幸福や漁業経営の向上へつながるのではないでしょうか。

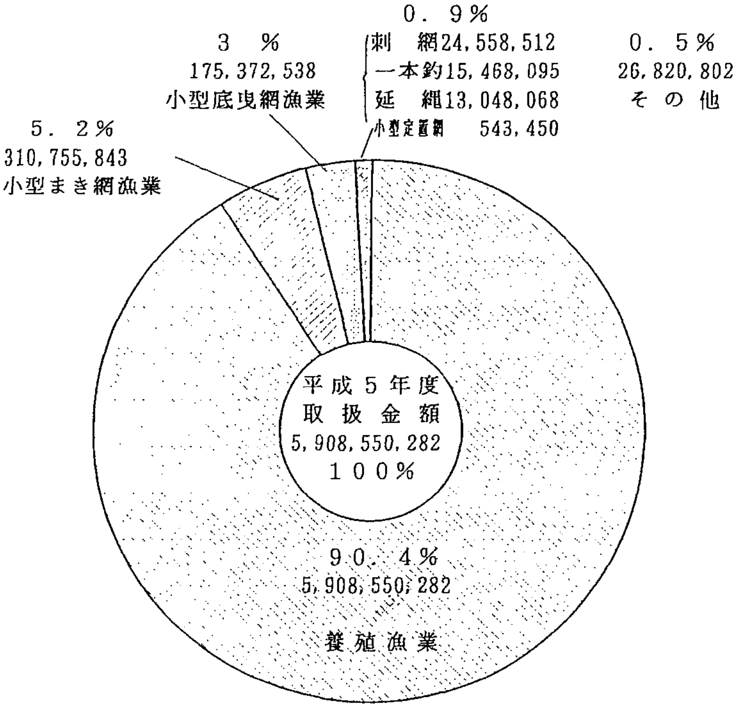
垂水市漁協海面漁業，養殖業生産量の推移　表 1



	60年	61年	62年	63年	元　年	2　年	3　年	4　年	5　年
総生産量	6459	7391	7059	7347	3737	5150	4890	6954	6025
養殖収穫量	4705	5761	5208	5637	2369	3868	3616	5730	5115
漁業漁獲量	1754	1630	1851	1710	1341	1282	1274	1224	910

表２

平成５年度漁業種別水揚高表



位置図　　図１

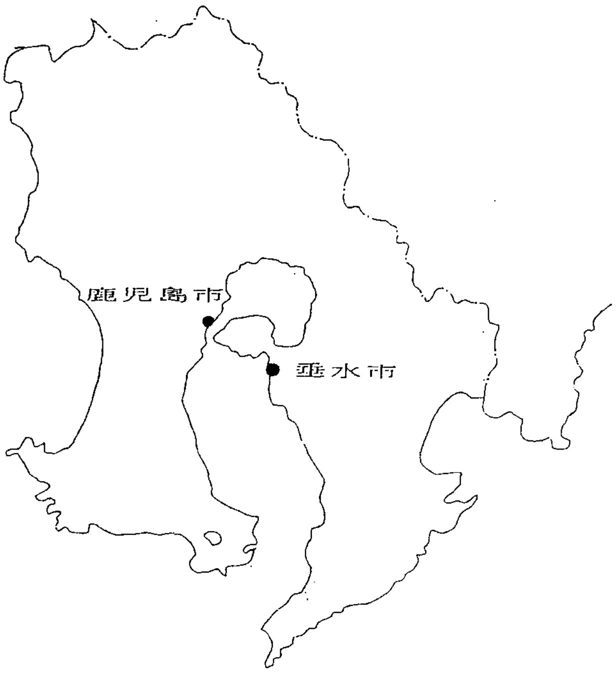


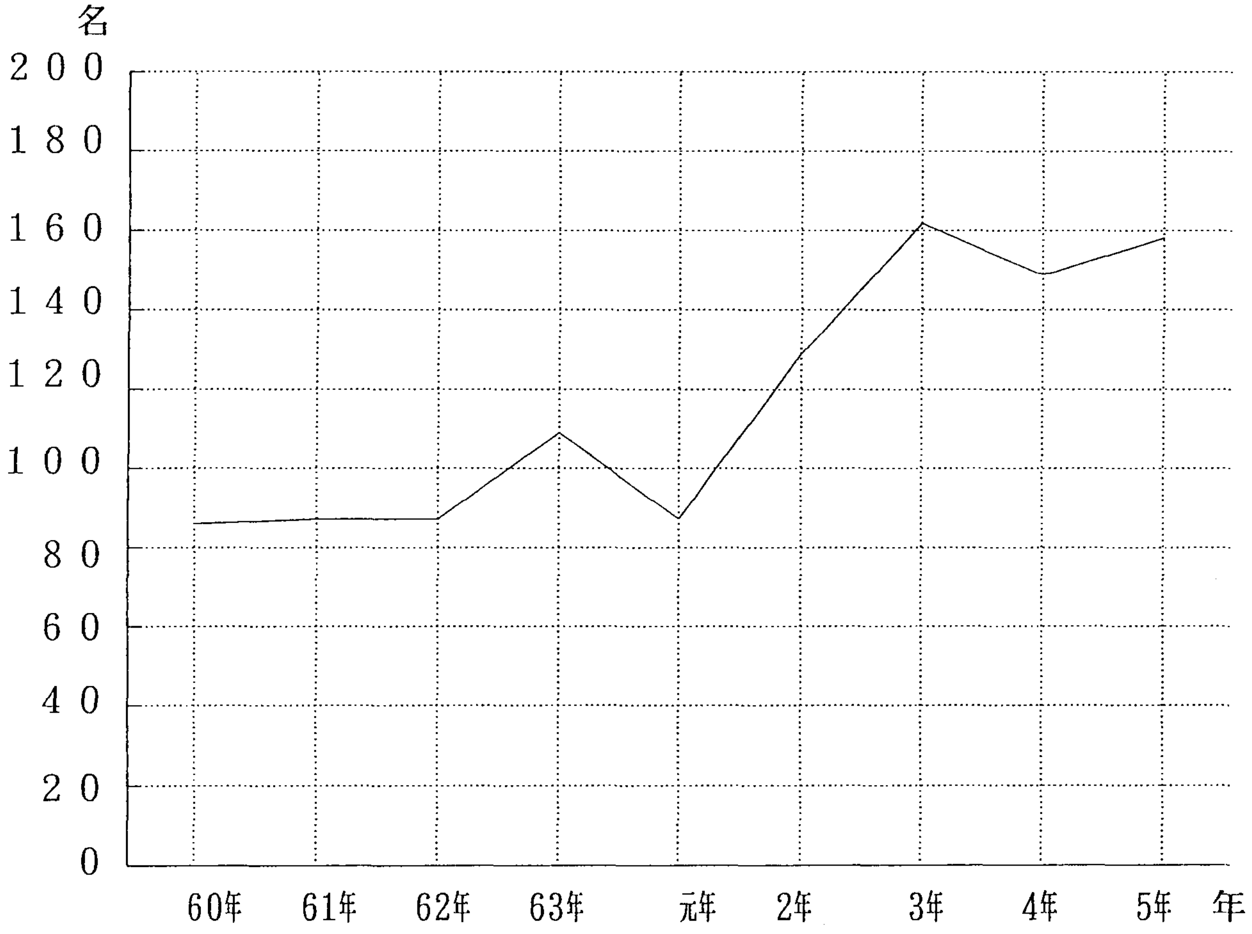
表 3

健康教室年間スケジュール

学　習　内　容	開　催　時　期
1．年間計画の検討	7月
2．救　急　処　置	8月
3．子供の食生活、肥満、おやつの問題	8月
4．魚のアイデア料理・魚の効用	9月
5．「健康づくりと運動」講演会	9月
6．高脂血症の予防と運動の効用	10月
7．グランドゴルフ大会	11月
8．健康診断の食生活事前学習会	1月
9．健康診断	1月
10．健康診断結果報告会	2月

表 4

健康診断受診者数



	60年	61年	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年
受診者数	86	87	87	109	87	129	162	149	158

行　事　予　定　　表5

月　別	内　　　　容
4月	第36回漁婦連通常総会 平成5年度垂水市漁協婦人部通常総会 漁　婦　役　員　会 地区新委員親睦会
6月	石　け　ん　販　売（第1回）
7月	海岸清掃作業 健康教室（学習会） お返し廃止のし袋普及月間（～8月）
8月	健康教室（学習会） 家計簿記帳推進月間（～9月） 天然石けん特別普及推進月間（～10月）
9月	九州・山口地区漁協婦人部研修会 第31回全国水産業従事者グループ研修会 魚料理講習会 健康教室　・　石けん販売（第2回）
10月	健康教室
11月	湾東地区漁協婦人部研修会 健康教室（グランドゴルフ大会） 第25回県婦人大会
12月	海岸清掃作業
1月	県漁村青壮年婦人活動実績発表大会 健康教室
2月	生涯学習大会 厚生連　健康診断 健康教室（健康診断結果報告会） 役員研修旅行
3月	年度末貯蓄推進運動

シマアジ飼付け漁業に取り組んで

屋久町漁協 あゆみグループ　箕作順二

1　地域と漁業の概要

私の住む屋久島は，鹿児島市より南へ130kmの海上に浮かぶ周囲105kmの小さな山岳島である。中央部には，洋上アルプスと呼ばれる宮之浦岳をはじめ，2,000m級の山々がそびえ立ち，また，月に35日雨が降ると言われるほど降水量も多く，縄文杉を始めとする豊かな自然を育んでいる（図１）。

人口6,626人の屋久町は島の南半分を占め，トビウオ，ポンカン，タンカン，ヤクスギ工芸品を特産物とする気候の穏やかな町である。

私の所属する屋久町漁協は，正組合員89名，准組合員22名，計111名から成り，平成５年度の水揚げは，934t，４億８千万円で近年ほぼ横這い状態である（図２）。

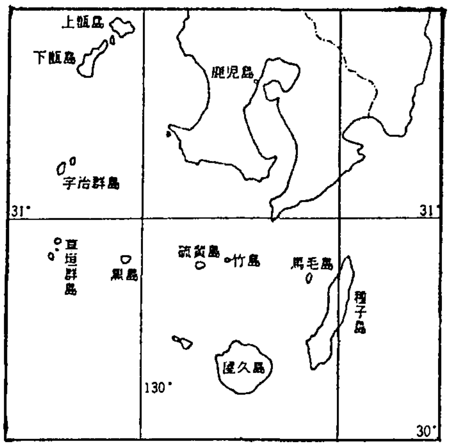
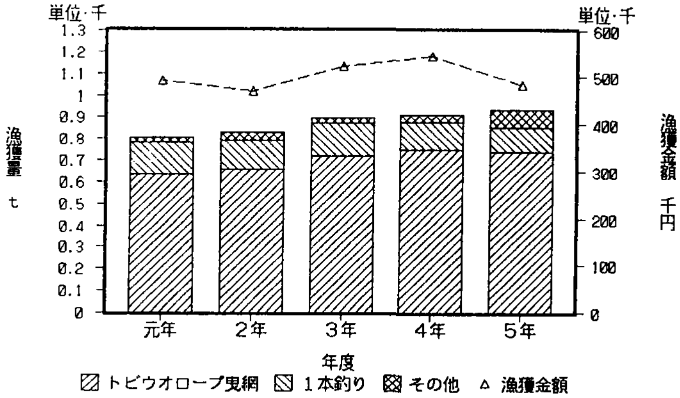


図１　位置図

漁船階層別にはほとんどの船が０～５トン未満の小型船となっている（図３）。また，主な漁業は，トビウオロープ曳き，瀬物一本釣り，アサヒガニかかり網，小型定置網等である（図４）。



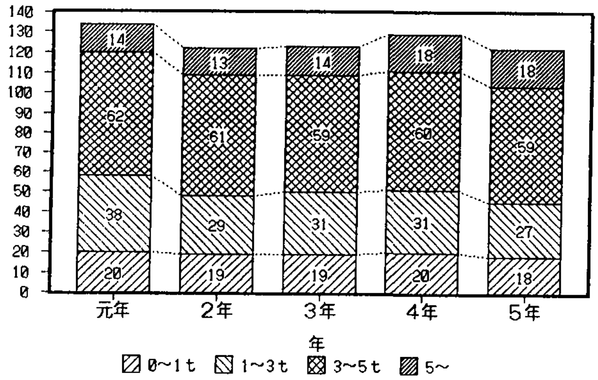


図２　漁業種類別漁獲量の動向　　　図３　階層別漁船隻数の動向

漁業種類	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
トビウオロープ曳	ハマトビ，ツクシトビ	アゴ		アヤトビ，アカトビ	ホントビ		ホントビ		ホントビ			
トビウオ流し網										ハマトビ		ハマトビ
一本釣り	ハガツオ アオリイカ		瀬物		瀬物		瀬物		タルメ	シマアジ		アオリイカ
延　縄	スギ		アラ，シロダイ，アオチビキ，他					アラ，シロダイ，アオチビキ，他				
トコブシ漁												

図４　主な操業パターン

2　グループの組織及び活動の動機

屋久町漁協あゆみグループは昭和52年１月に発足し現在部員数25名，平均年齢32歳の比較的若手の多いグループである。主な活動としてはトコブシ，マダイの放流，スポーツ大会の主催，各種祭典への参加等である。

また，部員の大半は４～11月にはトビウオロープ曳漁に従事しているが，12～３月には，瀬物一本釣り等を行っている。

従来から12～３月は時化が多く，沖合いでの操業が難しいうえ，これといった対象魚種もなく，この時期に対応する魚種，漁法がないものかと思案していた。

このような状況の中，次の動機により冬場の組み合わせ漁業の目玉として，シマアジ餌付け漁業の導入に取り組んだ。

(1) 資源的に未利用である

シマアジは，混獲魚として僅かに漁獲される程度で，ほとんど利用されていなかった。反面，遊漁者によって大型魚の釣獲がなされていた。

(2) 高級魚とされ高価格が期待できる

大都市市場の平均単価は2,500円／kg前後で比較的安定している。

(3) 他県や他地域で餌付けの取り組みがされている

高知県では餌付け漁業に，また，指宿，奄美では餌付け型栽培漁業について取り組みがなされている。

(4) 冬場の時化が多い時期でも出漁が可能となる

餌付け漁場を極沿岸に設定できる。

(5) 初期投資が小さくてすむ

餌付け場の整備や漁具の作成に要する経費は小さくてすむ。

3　活動の状況と成果

(1) 餌付け漁業の開始

平成３年12月，数隻が掛かり釣りによりシマアジを漁獲し，漁協にも日に1.5～2.0 Kgのシマアジが数尾づつ水揚げされるようになった。

このことは，餌付け漁法を始めようとする私達にとっては朗報であり，取り組みに半信半疑だった者も興味を示すようになった。

このような状況の中で，餌付け漁業に参加する船の代表が集まり，①漁場，②餌付け施設，③餌付け方法，④餌付け管理，⑤漁業管理の検討を行った。

このうち餌付け施設，まき餌等経済面については町に協力をいただいた。

漁場は水深30～40ｍの砂地で転石が点在し，時化でも出漁可能な漁港から近距離のところとした。

施設は漁場の特性を考慮して図５のとおりとした。

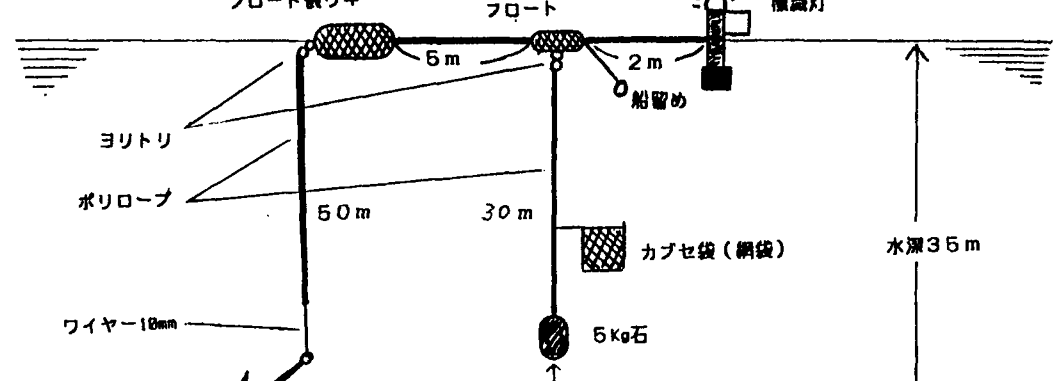


図５　餌付け施設

飼付け方法としてはエサ，まき餌の量などについて検討を行った。

飼付け管理としては飼付け作業や蝟集状況の確認について検討した。飼付け作業については，４～５隻がグループを作り当番制で行うこととした（表１）。蝟集状況の確認は飼付け作業時に魚探により確認し，同時に潮の状況なども合わせて日誌に記録することとした（表２）。

表１　シマアジ飼付け餌まき当番表

月.日	曜日	当番者名	月.日	曜日
1月3	日	11金吉丸 11金吉丸	1月16	火
4	月	海王丸 安永丸	17	水
5	火	伸龍丸 勝丸 若丸	18	木
6	水	三栄丸 福美丸 広福丸	19	金
7	木	はやた丸 丸喜丸	20	土
8	金	由紀丸 政丸	21	日
9	土	光栄丸 八重丸	22	月
10	日	黒潮丸 漁光丸 大和丸	23	火
11	月	岩川栄 中江信之	24	水
12	火	順生丸 12金吉丸	25	木
13	水	健勝丸 丸且丸 [illegible]	26	金
14	木	つばめ丸 なつき丸 美福丸	27	土
15	金	昭丸 昭栄丸		日
		11金吉丸 11金吉丸		
		[illegible]		

表２　シマアジ飼付け試験事業日誌

船名	健勝丸
年月日	平成5年1月13日
天候	曇
潮の状態	イ.早い　ロ.遅い　ハ.止
ブイの状態	イ.普通　ロ.流み
投餌時間	AM 6.00
餌の量	オキアミ　袋、タレクチ4袋
魚探の反応状況	大の反応有り
漁獲状況	
その他	

漁業管理としては漁協による漁獲量の管理や資源管理について検討した。資源管理については，活魚水槽への投入時間等を考慮して操業時間を午後３時までとし，土曜日を休漁日とした。

以上をまとめると表３のとおりである。

表３　　検討会における検討事項と検討結果

検討事項	内容	検討結果	備考
漁場	水深 底質 港からの距離	３０～４０ｍ 砂質＋転石 出来るだけ近く	
飼付け施設	別図	簡易で安価，また速い潮流に耐えられるような施設	図５
飼付け方法	エサ まき餌	タレクチ，オキアミ ４箱　（H4～タレクチのみ）	
飼付け管理	投餌方法 蝟集状況の確認	４～５隻一組の当番制 投餌時に漁探にて確認	表１ 表２
漁業管理	漁獲量の管理 資源管理 休漁日の設定 操業時間の制限	体重別漁獲尾数をパソコン管理 土曜日休日 午前６時から午後３時まで	

当初決定した漁場では飼付け開始後７日間を経過しても漁獲が見られなかったことから試験を中止した。

その後，遊漁者や掛かり釣りによる釣獲状況から新たな漁場に変更して再度試験を実施した。この漁場では，飼付け作業を開始した直後から蝟集が見られ，約30隻が集団で操業し想像以上の漁獲があった。

（2）飼付け漁業の現況

漁期は概ね11月から３月で年により若干の差が見られる。

漁獲されるシマアジの大きさは漁期はじめは比較的大型の３～５kgが多く，後半はほとんどが小型の１～２kg級となる（表４）。飼付け漁業によってシマアジはもちろんイシダイ，カンパチ，タマメ，青チビキ等も漁獲される（図６）。

表４　シマアジの月別体重組成別漁獲尾数の動向　上段　尾数：尾　下段　構成比：％

	1kg未満	1～2kg	2～3kg	3～4kg	4～5kg	5kg以上	合計
H4.12	1	190	105	224	131	57	708
	(0.1)	(26.8)	(14.8)	(31.6)	(18.5)	(8.1)	(100)
H5. 1	0	463	98	128	56	19	764
	(0.0)	(60.6)	(12.8)	(16.8)	(7.3)	(2.5)	(100)
2	2	98	12	16	1	2	131
	(1.5)	(74.8)	(9.2)	(12.2)	(0.8)	(1.5)	(100)
11	4	492	75	129	94	31	825
	(0.5)	(59.6)	(9.1)	(15.6)	(11.4)	(3.8)	(100)
12	5	218	18	21	8	9	279
	(1.8)	(78.1)	(6.5)	(7.5)	(2.9)	(3.2)	(100)
H6. 1	152	960	15	16	2	4	1,149
	(13.2)	(83.6)	(1.3)	(1.4)	(0.2)	(0.3)	(100)
2	8	110	3	6	1	2	130
	(6.2)	(84.6)	(2.3)	(4.6)	(0.8)	(1.5)	(100)

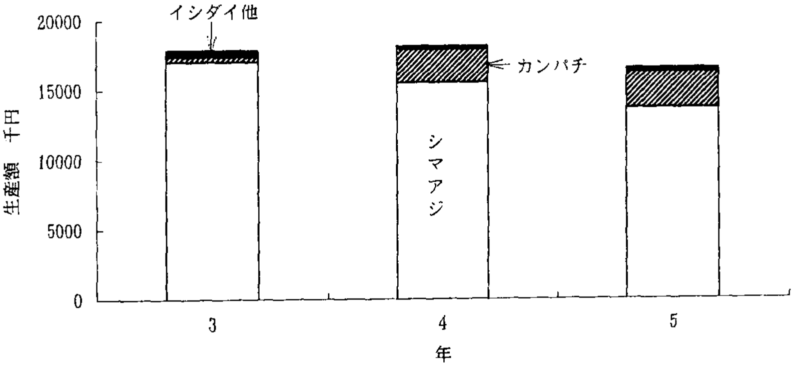


図６　飼付け漁業での魚種別漁獲金額の動向

開始後３年間の各漁期（11～３月）の飼付け漁業による漁獲量，金額は，平均で５トン，17百万円程度である。同じ漁期の一本釣りに対する割合は漁獲量で約16%，金額で約31%となっている（図７，８）。

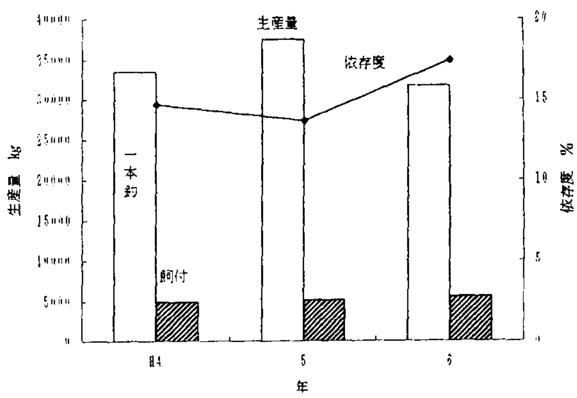


図7　飼付け漁業と一本釣りの漁獲量及び依存度の動向

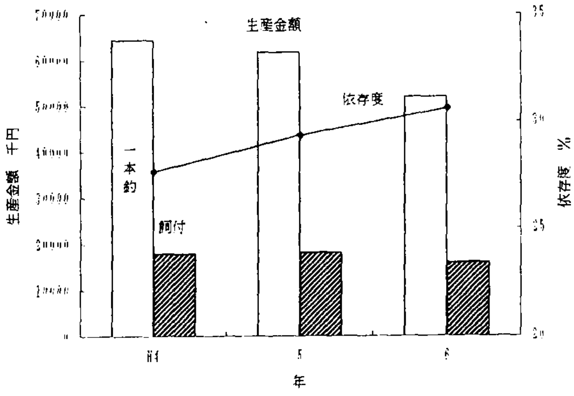


図8　飼付け漁業と一本釣りの漁獲金額及び依存度の動向

月ごとの飼付け漁業による漁獲金額の依存度は平均で約30%で，最大では約70%にも達している（図９）。

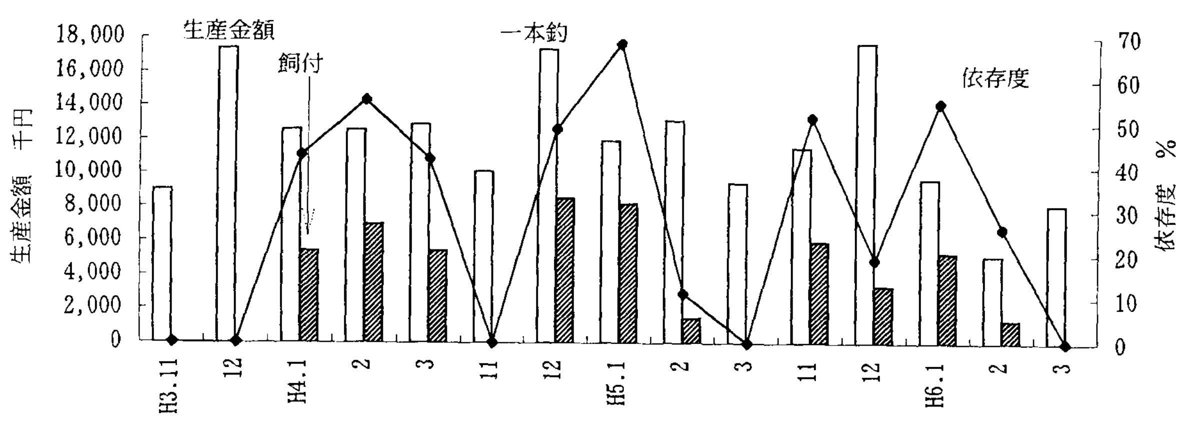


図９　月別の飼付け漁業と一本釣の漁獲金額及び依存度の動向

平均単価は，シマアジで3,000～4,800円／kg，イシダイ，カンパチ，タマメ等その他の魚種で1,500～4,000円／kgとなっている（図10）。

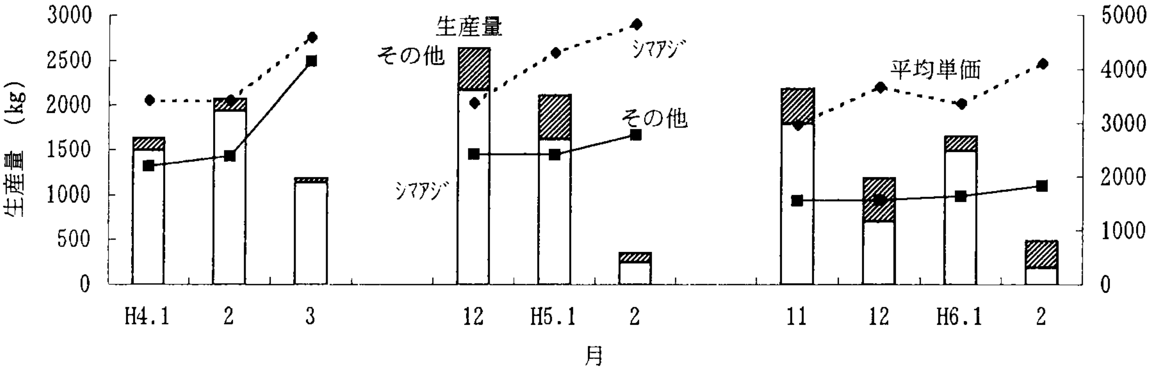


図10　月別の餌付け漁業の魚種別生産量及び平均単価の動向

(3) 漁具漁法の改良

当初仕掛けについてはホタ釣りの仕掛けを基本として流用していた（図11）が，次のような問題点が生じた。

ア　ハリス切れや口切れでばらすことが多い

クッションゴムが短いためシマアジの強烈な引きと口の弱さに対応できない。

イ　まき餌の調節ができない

まき餌篭にあんどん篭やロケットを使用していたため，潮流の速いこの海域では魚のいるタナまでまき餌が届かない。

ウ　道具のトラブルが多い

針が多いため道具がからまってしまうことが多い。

エ　針により瀬がかりに差がある

従来使用していた小ダイ針を用いた場合，底を流すと瀬がかりが多い。

このため次のような改良を行った（図12）。

オ　クッションゴムの強度と伸びを研究し，テンビンの上部に７～10ｍの長さのものを取り付けシマアジのハリス切れや口切れ対策とした。

カ　まき餌篭をあんどん篭から傘袋へと変更した。この傘袋は従来のものの上部に開口部の調節可能なように網を付けたもので，まき餌の調節ができるようにした。

キ　針数を５本から２本へ変更した。

ク　針は小ダイ針からムツ針に変更した。その結果，瀬がかりは少なくなった。

ケ　ハリスについては，クッションゴムを長くしたことで，当初の12号から７号程度まで落とすことが可能であることがわかったが，資源保護を考え10号を使用することとした。

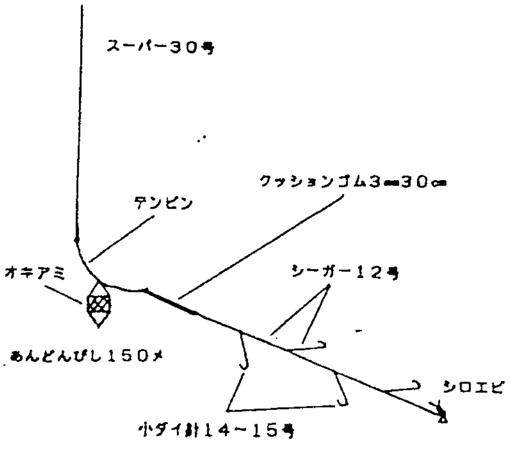


図11　当初の仕掛け

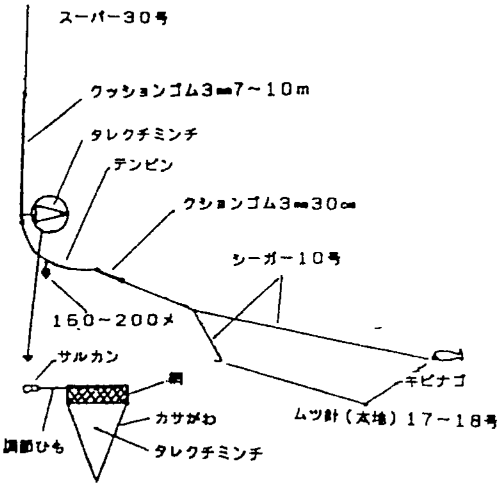


図12　改良後の仕掛け

その他の改良としては次のとおりである。

(1) まき餌をムロ等の雑魚が好むエビ（オキアミ）からタレクチのミンチに，つけ餌をエビからキビナゴに変更した。

(2) 食いに応じ良いときはタナを上げ，悪いときはタナを下げて釣る。

(3) 群れて回遊するため，食いが起こってきたら集中して素早く釣る。

このように漁具，漁法等についてかなりの改善が図られたが，未だ改良点も多く，今後更に研究していきたいと考えている。

(4) 流通の改善

当初漁獲された魚は，活魚として鹿児島市場へ出荷したが，２千円程度で期待した値が付かなかったため活魚出荷は取りやめた。

そこで，一旦活魚水槽にストックし，翌朝活け〆し地元出荷を行っている。現在のところの価格は，3,000～5,000円／kgである。地元仲買業者によれば大都市圏へ出荷されるようである。

シマアジは非常に繊細で荒く扱うと「やけど」や「すれ」が発生し魚価に大きく影響を与えるため，漁獲物の取扱いの改良を行った。

ア　釣り上げた魚は魚体を痛めないように結節のないモジ網でできたタモで取り込み，柔らかいマット上で針をはずし，素手でさわらないように素早くイケスに入れる。

イ　水揚げの際は所有者が判別できるように，あらかじめ船ごとに決められた色付きゴムなどにより尾を縛り，活魚水槽に投入する。

ウ　計量は翌朝活け〆の際に行い，「すれ」「やけど」が発生しないように極力注意する。

エ　鮮度を保つために，しめた後水氷に30～40分浸け，血抜と魚体の冷却を行う。

4　波及効果

シマアジ飼付け漁業では，シマアジだけでなくイシダイ，カンパチ，タバメ等対象魚以外の魚種が数多く漁獲され，工夫次第で他の高級魚の漁獲も見込まれる。これらの魚種のうちカンパチについてはシマアジ同様翌朝活け〆した後，タバメ，イシダイについては活魚として鹿児島市場へ出荷し良い成績を上げている。

また，従来の１泊２日航海の沖合一本釣では危険がともない様々な面で不安がつきまっとていたが，この漁法を導入したことにより，それらの不安が解消され，出漁日数も増え，身体的に楽になった。その上，休漁日はもちろん朝夕子供と一緒の時間を持つことができ，家族サービスもできるようになった。漁場が近海であるため日曜日には息子と一緒に漁に出ることもあり，いずれは後継者になってくれないものかと考えている。12～３月にかけて最も時化の多い時期に，操業の安全が図られるのに加えて燃油の節約も可能となった。

これらのことを考慮すると，このような高級魚を対象とする沿岸での漁業は省力化，安全操業を目指している私達にとってまさに目標とするものである。

他にも，いままでトビウオロープ曳き漁のみで一本釣りに興味を示さなかった若い後継者が，このシマアジ飼付けを機に釣りにも目を向けるようになり，一本釣りを覚え，潮の流れ，魚の動き，天候などトビウオロープ曳き漁では他人まかせであったことを，己の肌で覚え，漁師としての資質の向上が図れたのではないかと考える。

5　今後の課題と展望について

年々一本釣りによる漁獲も減少傾向にあり，飼付け漁業のような高度な管理のできる漁業を目指し，シマアジの生態の研修も行い，人工種苗による放流を含め飼付型栽培漁業の可能性も探っていきたいと考えている。

さて，近年作り育てる漁業が叫ばれている中，私達の屋久町漁協もトコブシ，マダイの放流やイカシバ，築磯等の漁場造成も行っているが，今後乱獲による資源の減少を繰り返さないように，漁場と資源の管理を行っていくことは重要な課題であると考えている。

最後に，このような資源管理型漁業を推進できるよう，新漁法の導入，新魚種の放流，漁場の管理などについて，町はじめ各漁協，県・普及所などの益々の御支援御指導をお願いする。

海づくり・魚づくり・人づくり

－ 青壮年部活動を通して －

かいゑい漁協青壮年部　　坂元茂教

1　地域と漁協の概要

私の所属しているかいゑい漁業協同組合は，薩摩半島の南端に位置し，昭和５０年３月知覧町漁協と合併した結果，現在，開聞町・頴娃町・知覧町の三行政区域にまたがる漁協となっており，本所を開聞町川尻に，西部支所を頴娃町別府石垣に置き，各種経済事業を行っています。

管内には３７ｋｍにも及ぶ長い海岸線を有し，地先漁場は黒潮の影響を受け比較的水温は高く，また開聞岳周辺は天然礁にも恵まれており，大型定置，小型定置，刺網，曳縄等の好漁場となっています。また，当漁協組合員は地先漁場での操業の外，中型旋網，一本釣，延縄漁業を中心に，種子島・十島周辺海域まで出漁し操業しています。

図１　かいゑい漁協位置図

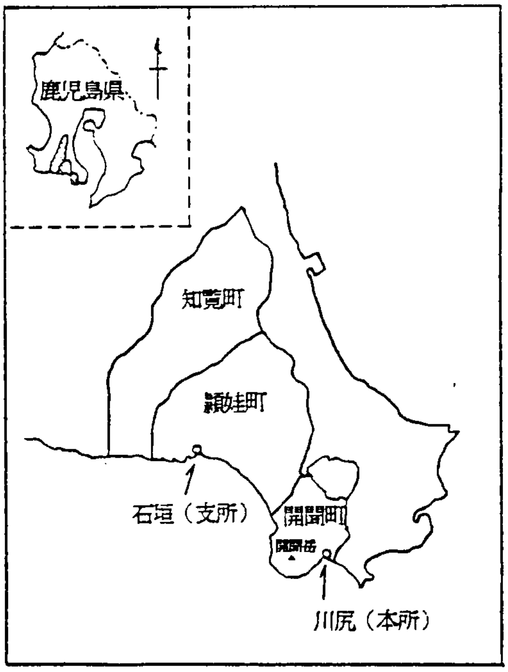


図２　漁獲量に占める漁業種類別割合
（平成５年度漁協資料）

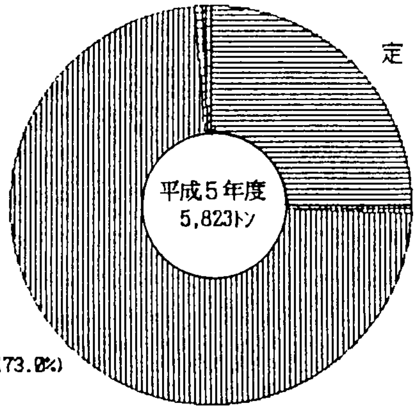
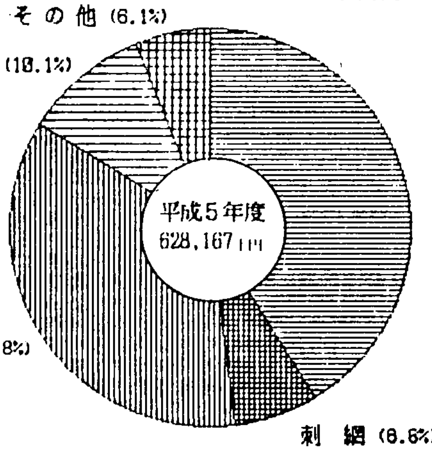


図３　漁獲額に占める漁業種類別割合
（平成５年度漁協資料）



2　青壮年部の組織と運営

かいゑい漁協青壮年部は，沿岸漁業の発展を図ると共に，将来，地域社会の中堅的漁業者となるべく会員の科学的・自主的・協調的人間つくりと会員相互の親睦を図ることを目的に昭和５４年６月に漁業後継者２８名で発足しました。

役員は，会長１名・副会長１名・支部長１名・会計１名・監事２名で，地区が広範囲にまたがる漁協の特性上支部長制を引いています。

現在会員は１８名で，そのうち定置網に従事しているのが１４名，刺網・一本釣が４名ですが，年齢構成は図４のとおりで，若手の加入が少ない上に，会員が年々歳を重ねていく状況です。「このままでは青年部の存続すら危ない。」と，常々話題となっていました。「青年部の規約を改正し，年齢資格を満４５歳以下から満５０歳以下に引き上げたらどうだろうか。しかし，それは本当に意味のあることなのか。」と，私たちは考えました。そういう中で，今年度青年部を卒業する予定であった方が「年をとると物事を保守的にしか考えられなくなり，新しいことに挑戦しようという意欲も情熱も薄れてしまう。そこで２０代３０代の若者の熱気ある発想を分けてもらい，その代わりに自分の培ってきた経験を教えよう。そしてまた一緒に頑張って行こう。」の一言で，問題はひとまず解決しました。よって青年部を改め青壮年部となった次第です。これでより中身の濃い活動内容も期待できるのかもしれません。しかし，このことは残念ながら本当の解決には至らず，今後議論していかなければならないひとつの大きな課題であります。

図４　年齢別青年部員数の推移

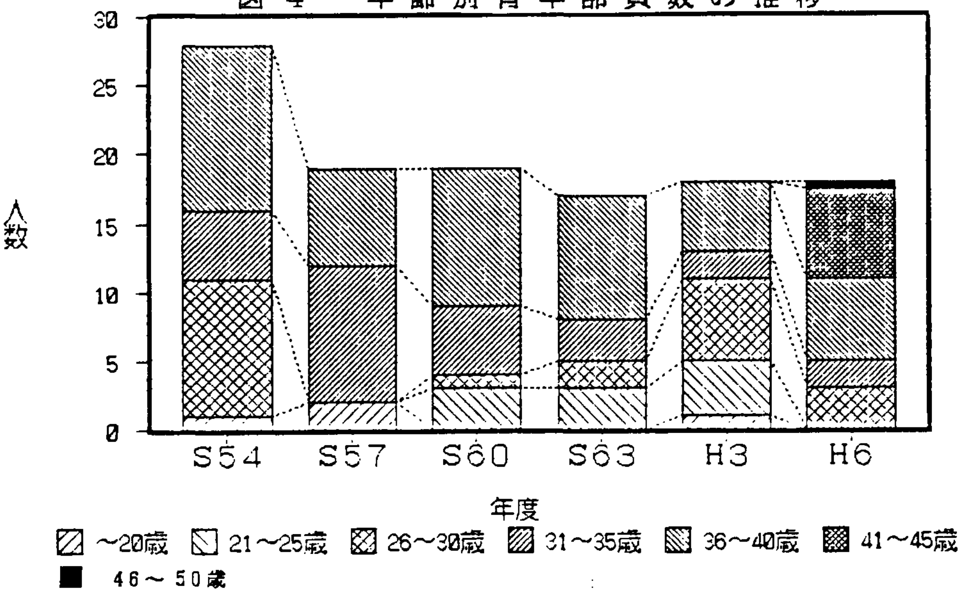


表1　　平成５年度青壮年部収支決算書

単位：千円

収入			支出		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
会費	456	19名×2,000円×12ヶ月	研修費	1,032	
助成金（漁協）	180	密漁監視50，活動助成金130	会議費	337	総会,月例会,漁青連総会
マダイ中間育成	453		負担金	79	漁青連負担金
雑収入	96		消耗品費	41	ﾏﾀﾞｲ中間育成，ﾋｼﾞｷ･ﾜｶﾒ造成
研修視察負担金	150	15名×10,000円	雑費	12	ゴミ袋代，定担借入利息他
前年度繰越	406		次年度繰越	240	
合計	1,741			1,741	

3　青壮年部活動の概要

私たちの青壮年部の活動は，月例会や部の最高議決機関である総会で決められます。年間のスケジュールは表2のとおりですが，今回は，藻場造成，マダイの中間育成・放流等を中心に「海づくり・魚づくり・人づくり」の観点からお話したいと思います。

表2　青壮年部活動の年間スケジュール

活動項目＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
青壮年部の活性化と対外交流												
・通常総会及び月例会	毎月月例会			総会								
・県漁協青年部連合会事業への参画						随時						
・南薩水産普及協議会事業への参画						随時					グループ交換会	
・県漁業振興大会への参画	振興大会											
資源管理型漁業の推進												
・マダイ中間育成・放流・餌付け					中間育成　放流　餌付け							
・ヒラメ放流												
・カサゴ中間育成・放流						中間育成						
・ヒジキ場造成・追跡調査	追跡調査				造成							
・ワカメ場造成・追跡調査	追跡調査											造成
・イカシバ投入・追跡調査					投入・追跡調査							
漁場環境の保全												
・海岸清掃									随時			
漁業経営の安定と新技術の学習												
・密漁監視						周年						
・研修視察												
・各種研修会への参加						随時						
地域興しの推進												
・各地産業祭・港祭への参画		トコトン祭	えびす祭					水産の日ゴッツイ祭				

(1) 海づくり（藻場造成）

藻場は，稚魚の保育場や隠れ場として大切な働きを持っています。放流された稚魚の生存率も藻場があるかないかによって変わってくるのだと思います。

以前は開聞岳周辺の地先はホンダワラ類が繁茂していましたが，昭和５３・５４年の頃から急に消えてしまったと聞いており，現在はほとんどありません。

そこで，ヒジキの藻場造成を平成２年から試験的に行ってきました。まず初めに，成熟したヒジキを玉ねぎ袋に入れ，それを延縄式に吊るし受精卵の付着を試みましたが（母藻移植）うまくいきませんでした。次はヒジキの根の付いた岩盤を直接削り取って試験場所に速乾セメントで接着しましたが（ヒジキ根岩盤移設），これもうまくいきませんでした。どうすればいいのか悩んでいたとき，当時の普及員が，専門技術員に相談したところ，ヒジキのついた玉石を持ってきて投入したらどうだろうか（母藻玉石移設）ということだったので，それも試みましたが残念ながらだめでした。「さぁいよいよ今年はどうしたらいいものだろう。」と悩んでいたところ，幸運なことにその専門技術員が私たちの普及所の所長として就任され，直接指導して下さったのです。

それは，真新しい山石を取って来て，それをきれいに洗浄し活魚タンクの中に沈め，そこに成熟したヒジキを浮かべます。そして下からエアレーションをかけて受精卵を直接山石に付着させ，確認してから海に設置するという方法ですが，まだ結果はわかっていません。

ヒジキは藻場としての他に健康志向食品としても期待されており，何とかヒジキの藻場ができないものかといつも考えています。

ヒジキ場造成は失敗の連続ですが，成功しているものもあります。それはワカメ場造成です。これも平成２年から着手しているのですが，漁協に購入していただいたワカメの種糸をロープに巻き付けて延縄方式で沖出ししています。もともとこの地域はワカメは自生していなかったようですが，現在では自生のワカメもかなり見られています。ロープの芽株から胞子が出て，それが岩に着いてワカメに生長したものと考えられます。しかしながら，昭和５０年代前半の藻場に比べたら気休め程度で，まだまだ及びません。

このような磯の状況で，「稚魚はどうしているのか。私たちの中間育成・放流しているマダイの稚魚はどこでどのように生活しているのか。」という疑問が生じて来たのです。

表４　藻場造成実績

項目 ＼ 年度（平成）	2	3	4	5	6
ヒジキ場造成					
母藻移植	○	○		○	○
ヒジキ根岩盤移設			○		
母藻玉石移設				○	
人工採苗					○
磯掃除				○	○
ワカメ場造成					
種糸の延縄	○	○	○	○	○

(2) 魚づくり1（マダイ中間育成）

そこで青壮年部のもう一つの大きな活動であるマダイの中間育成・放流についてお話しします。

近年，資源管理型漁業の定着が進みつつありますが，私たちのかい氣い漁協でも表3のとおり，昭和61・62年度にガザミの中間育成放流，昭和61年度からヒラメ放流，そして昭和63年度からマダイの栽培技術習得事業を導入し，青壮年部が種苗の受入れから中間育成そして放流まで引き受けて行っています。養殖技術に乏しい私たちが，マダイの中間育成を始めるには大変な苦労がありました。なぜならば，私たちの組合は外洋に面しており養殖業が導入できず，また魚にも恵まれ漁場はすぐ目の前にあるという利点を生かし，鮮度の高い魚を出荷できることから，活魚としての取扱いも必要がなかったからです。

表3　中間育成・放流実績

魚種	年度	受入尾数(尾)	受入ｻｲｽﾞ(mm)	中間育成日数(日)	放流尾数(尾)	放流ｻｲｽﾞ(mm)	事業名
マダイ	63	50,000	37.0	45	42,000	90.0	栽培技術習得事業
	元	40,000	37.8	55	36,000	90.0	〃
	〃	—	—	—	150,000	73.4	広域栽培パイロット事業
	2	180,000	34.3	43	150,000	71.4	〃
	3	150,000	34.8	46	140,000	75.9	〃
	4	150,000	33.8	46	138,000	81.8	〃
	5	150,000	30.8	51	110,000	78.0	〃
	6	150,000	34.0	42	126,000	81.2	〃
ヒラメ	61				11,500		ヒラメ種苗放流事業
	62				12,000		〃
	63				7,800	80.0	〃
	〃				20,000	60.0	豊かな海づくり事業
	元				20,000	60.0	〃
	2				20,000	60.0	〃
	3				20,000	78.9	広域栽培パイロット事業
	4				20,000	92.6	〃
	5				20,000	98.7	〃
	6				20,000	81.9	〃
ガザミ	61	27,000	C_1	13	6,130	$C_{3\sim4}$	漁協単独事業
	62	20,000	C_1	13	4,155	$C_{3\sim4}$	〃
カサゴ	6	1,000	35.0	継続中			漁協単独事業

最初は，青壮年部の視察研修で魚類養殖やマダイの中間育成の先進地である坊津町や山川町からその技術を一から学び，見よう見まねで中間育成に取りかかったものでした。しかし，年を重ねる毎に技術も修得・向上して中間育成・放流も順調に進んできました。

この中間育成の技術が定置網に入網した魚やイカを蓄養して活魚として出荷する技術にもつながりました。更に，入網したものは出来るだけ生かして持って帰るという波及効果も生み，漁協の活魚の取扱いも図５～６のとおり大幅に伸びています。青壮年部が，活魚の技術を自分たちのためだけではなく，漁協や組合員の方々にも波及したことを誇りに思っています。

また，中間育成を行うことによってお金を得ていますが，これを青壮年部の運営費に充当して，先進地の研修視察等の費用に使っています。平成５年度は，岡山へアマモ場造成の研修視察に行き，また金比羅さんに大漁祈願もして来ました。活魚の技術を身につけられたばかりでなく，その得たお金で研修視察へ行き，そしてまた技術を磨く糧とする。つまりこのサイクルが，私たち青壮年部の活気ある活動を支えているのだと思うのです。

図 5　かいえい漁協における魚種別活魚水揚量

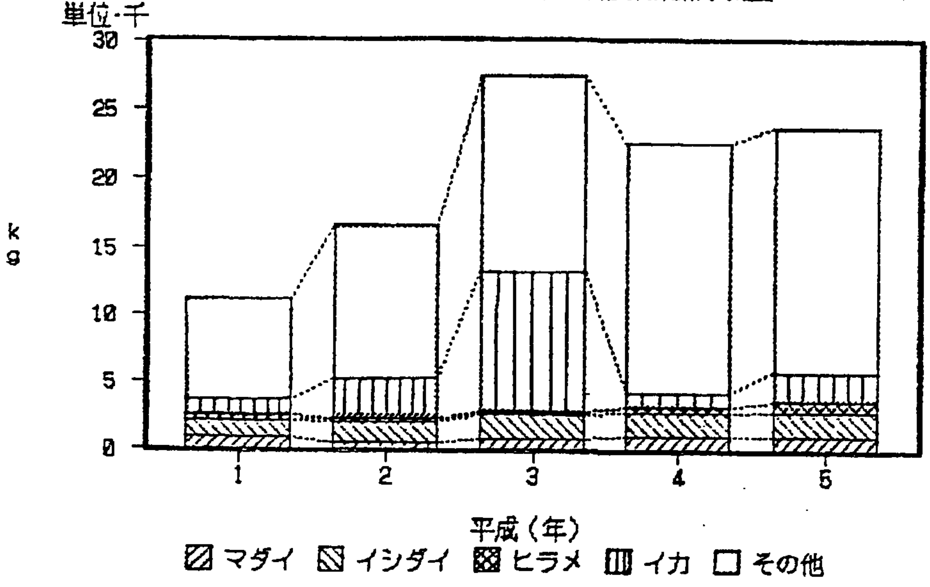
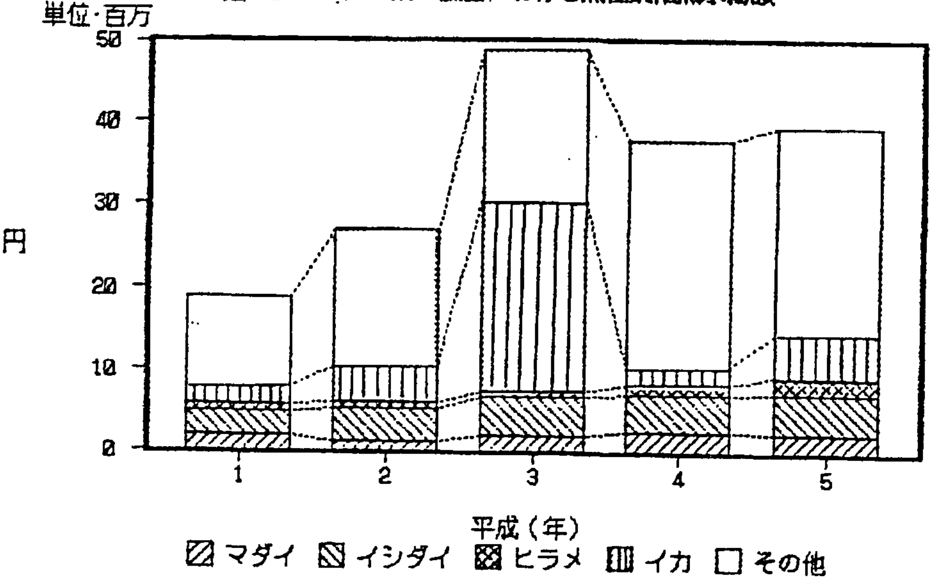


図 6　かいえい漁協における魚種別活魚水揚額



(3) 魚づくり２（マダイ放流）

「放流したマダイは！僕らのマダイは！本当に元気に大きくなっているのだろうか？」

青年部員一人一人の意識の中で，このような疑問がいつしか湧いて来るようになりました。そして，月例会の話題にのぼるようになり，「中間育成の技術はある程度達成した。しかし，マダイ稚魚の生活の場である藻場が少ない上に，藻場造成も失敗の連続だ。藻場造成は継続して行くとして，マダイの生存率を高めるためには，どうしたらよいだろうか。」いろいろ考えた結果，「放流方法を再検討してみよう。」という結論に達しました。

平成４年度までは，マダイは川尻漁港沖の並型魚礁に放流していました。しかし，数日後にはマダイを中間育成している港内に戻ってきているのです。最初は「網替え時に逃げたマダイだろう。」としか思っていなかったのですが，よく観察するとマダイの魚群の数や尾数からして，そうではないことがわかりました。決定的に確信したのは，タグを打ったマダイが多くいたという理由からです。「それだったら最初から居心地の良い港内に放流してあげよう。」という意見の一致を見たのです。そうすることで色々な利点が考えられるようになりました。。

ア　中間育成直後のマダイは餌の取り方を知らないため，外海では餌を取りにくいと考えられます。その点港内には天然の餌もいますし，餌をまいて更に餌付けも行えます。

イ　中間育成直後のマダイは外敵を知らないので，外敵の少ない港内で徐々に順応させることができます。

ウ　中間育成直後外海に放流されたマダイは集団を形成する尾数が多いので，定置網に入った場合，大きな被害となってしまいます。それに対して港内に放流したマダイは小さな集団が徐々に外海へ出ていくため，定置網をすり抜け易い上に，仮に入ってしまった場合でも被害は少なくて済みます。

平成５年度に放流マダイの一部を港内に放流したところ，９月末までは港内に滞留し，台風シーズンが過ぎた後，次第に港外へと出ていきました。港内放流後の餌は漁協で購入していただきそれを私たちが与えてきました。平成６年度は，中間育成後のマダイの９０％を港内に放流しました。放流されたマダイは，２～３ヶ月をかけて自然に順応する力を身につけ，次第に外海へ出て行くようです。どの位，生存率が向上するかはまだ分かりませんが，少なくとも定置網に入網する数は激減しました。

(4) 人づくり

マダイを港内に放流することで，川尻地区周辺の子供達が遊びに来てくれるようになりました。海や魚に関心を持ってくれることはとても嬉しいことです。しかし，問題点も出てきました。それは港内のマダイを海に遊びに来た人達が釣るということです。私たちが大切に育てて来たマダイが釣られてしまうのは非常に残念なことです。放流マダイであることや，漁業調整委員会の指示で１５㎝以下のマダイは釣ってはいけないことを知っている地元の人たちは，再放流してくれますが，知らない人の方が多いようです。かと言って，マダイ釣りをやめるように注意するのは簡単ですが，「マダイを大切にしながら，なんとか子供達や海に遊びに来た人達の足が遠のかないようにする方法はないか。」とみんなで考えました。

その結果，次のようなことを行えばどうかと思っています。

ア　これまでも実施したことは何回かあるのですが，子供達の手によるマダイ放流を毎年行う。

イ　漁協で購入していただいた餌付け用の餌を，子供達のお小遣いで買える１０円単位のお金で買ってもらい，子供達にまいてもらう。ほんの僅かでも，自分達の手で育てたという意識を大切にしてもらいたいのです。

ウ　“子供達が興味を持って更につくり育てているマダイ”ということで，間接的に一般の人々が釣りを止めてもらえないだろうか。

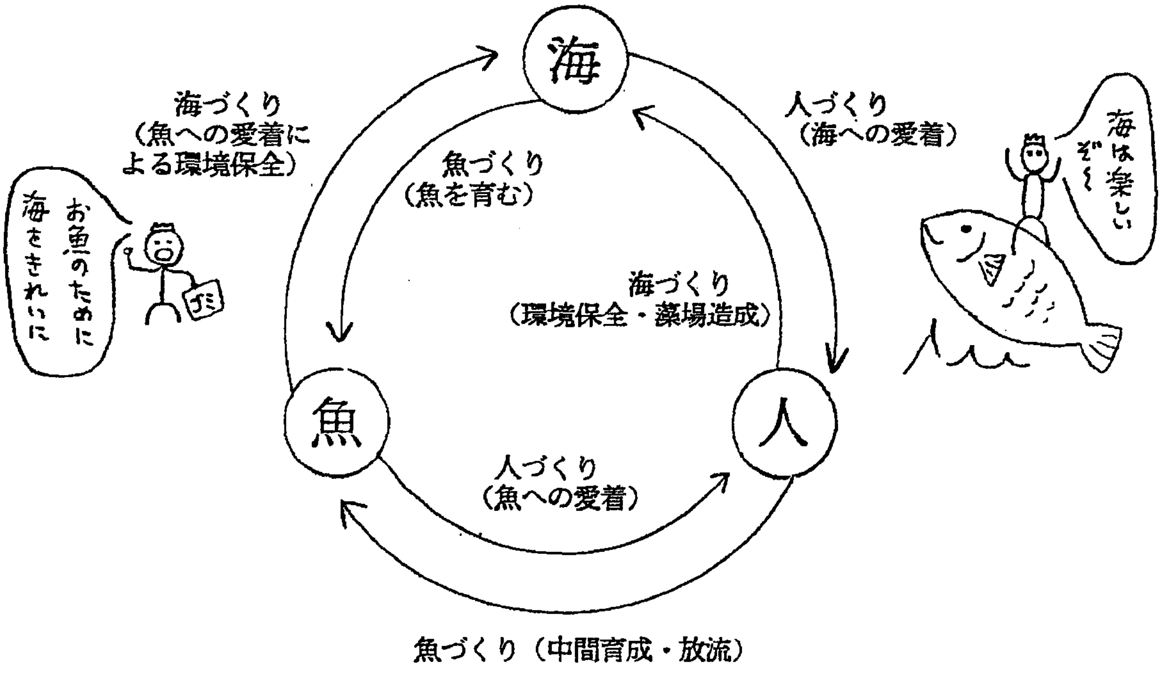
という３つのことを考えています。

そこで私は，川尻漁港や国立公園に指定されている周辺の海岸が花見で賑わう公園のように多くの家族連れで特に子供達でいっぱいになればよいと思います。そうなることで，子供達が興味を持って楽しく接している海に大人がゴミを捨てるということが少しでも減少し，家庭からの油や汚水のたれ流しを止めてくれれば，海はもっともっときれいになります。そして小さい頃から海に親しんでくれた子供達が，ゆくゆくは後継者に育ってくれるかも知れません。こういうことから海や魚を大切にしたいという意識が環境保全へとつながって行くのではないでしょうか。

4　おわりに

今，水産業を取りまく環境は厳しいとよく言われ，その中で特に人為的な影響による海洋汚染，乱獲による漁業資源の減少，漁業者の高齢化，後継者の激減が問題となっています。私たち青壮年部は，これまでお話ししてきたとおり「海づくり・魚づくり・人づくり」をモットーにこれからも活動を続けていくつもりです。地道な活動ではありますが，これが，今後私たちが漁業を続けて行く上での基本であると思っています。しかし，私たちの青壮年部だけでは小さな力でしかありません。本日参加の青年部・婦人部の方々には必ず私たちの考えに賛同していただけるものと確信しております。私は皆さんにお願いしたい。「海づくり・魚づくり・人づくり」の活動の輪を大きくしていこうではありませんか。

図７　漁業を支える「海づくり・魚づくり・人づくり」の輪



○“海づくり”は，人による環境保全・藻場造成や魚への愛着から生まれる，海を大切にする心によりなされます。
○“魚づくり”は，海が魚を育んでいることや，人による魚の中間育成・放流等によりなされます。
○“人づくり”は，魚や海への人の愛着によりなされます。

活気ある我らが漁協青年部

江口漁協青年部　西田良一

1　地域及び漁業の概要

私の所属する江口漁協は，日本三大砂丘の一つである吹上浜の北部に位置し，湯之元温泉と焼きものの里美山のある東市来町と，品質の高い日置瓦で名高い日吉町の２つの町にまたがっています（図１）。

江口漁協は，正組合員１５８名，准組合員１２７名，計２８５名の組合員からなり，時期的に産卵又は索餌のために西薩海域に来遊する多くの魚類を対象とした機船船びき網，固定式刺網，カジキ・サワラ流し刺網，吾智網，ツキヒガイを対象とした小型底曳網，かご網等の多種多様の漁業が行われています。漁協の年間水揚取扱い高は、平成５年度６９９トン，１１億７００万円となっています（図２）。

図１　位置図

江口漁港は，昔は長い砂浜にある川港で大きな漁船もいませんでしたが、皆様のおかげをもちまして，りっぱな漁港が整備されつつあり、漁港の近くには海浜公園も整備される予定で工事が進んでおります。その辺の変貌には私どももびっくりしているところです。

私は，昭和５４年，２９才の時に家庭の事情で帰郷し，しばらくパッチ網の生産組合に参加しておりました。しかし，２～３年続いた不漁と私の加入していた生産組合は高齢者が多かったため，昭和５９年に生産組合が解散したのをきっかけに思いきって漁船を購入し、一本釣を足掛かりに，現在では吾智網と各種刺網を組み合わした漁業を営んでいます。

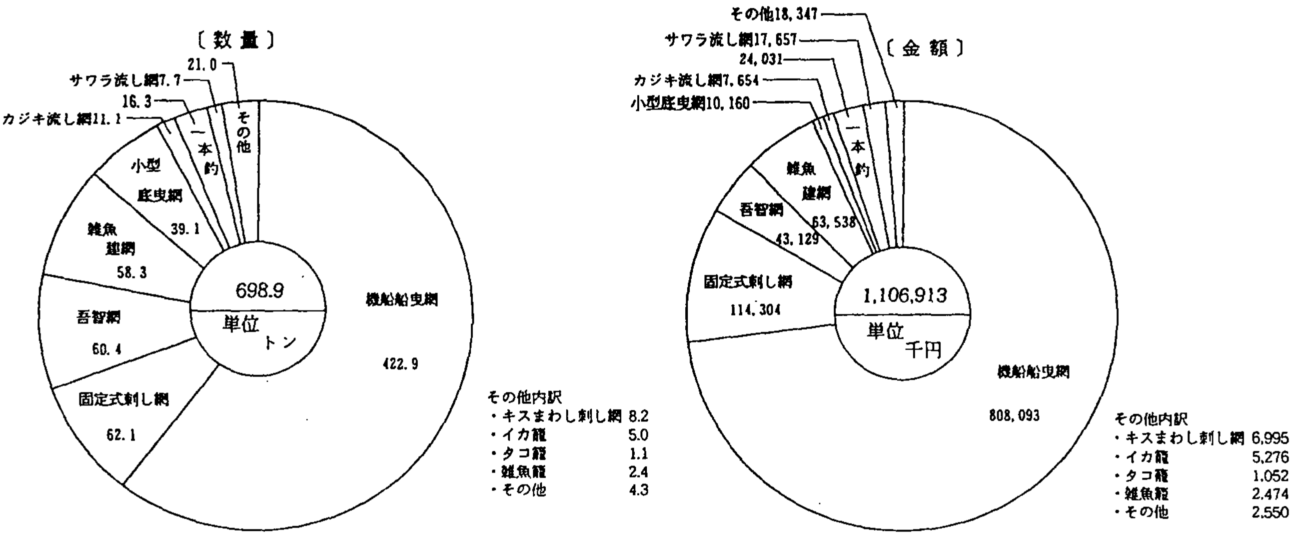


図２　平成５年度漁業種類別水揚げ（資料：業務報告書5.2.1～6.1.31）

2　グループ組織と運営

江口漁協青年部は，昭和５３年に漁業技術の研究と親睦を目的として結成され，「親しきなかにも礼儀あり」をモットーに研修等を中心とした活動を行って来ました。現在，部員は１４名で，大部分の部員はタイ類を対象とした吾智網とカジキやサゴシの流し刺網，冬場のヒラメ刺網などを組み合わして年間操業しています。結成直後は，部員が魚を捕るためだけの操業に終始し，毎日が長時間の労働で，部員間のコミュニケーションもなかなか思うようにいかず，お互いに批判をしあうような日々もありました。幾度となくグループの解散も考えた事もありましたし，グループの中でも対立し，別々のグループでの活動も考えた時期もありました。しかし，漁業に対する熱意や漁業経営に対する考え方はほとんど同じで，将来の漁業経営のきびしさ，不安等を定例会等で語り合う中で，お互いの団結が強くなってきました。

青年部の主な活動としては，月１回の定例会，定期的な港内清掃，先進地視察，学習会の開催，ふるさと港まつりへの参加，豊かな海づくり放流事業の協力，ヒラメの資源管理事業への協力，県内外の青壮年部との交流会，県漁青連活動への積極的参加，地元のボランティア活動等各種方面へ活発な活動を展開しているところです（表１）。

部の運営は，毎月１人 3,000円の会費と町及び漁協の助成金でまかなっており，平成５年度の決算は 888,434円でした（表２）。

（表２）平成５年度青年部収支決算書（H5.1.1～H5.12.31）

収入の部　（単位：円）

科　　目	金　　額	摘　　要
部会費	４７７，０００	3,000x13人x12月，3,000x1人x3月
助成金	１７０，０００	漁協 100,000，町 70,000
事業収入	１１６，３８７	港まつり活魚・鮮魚販売代金
雑収入	１２５，０４７	利息，その他補助金
計	８８８，４３４	

支出の部　（単位：円）

科　　目	金　　額	摘　　要
会議費	２４５，２１４	総会，定例会，交流会，忘年会
研修費	４８８，７８０	先進地視察研修，現地研修等
事業費	８５，４８０	港まつり，ソフトボール大会他
負担金	１９，１００	県漁青連会費
雑費	４９，８６０	
計	８８８，４３４	

（表１）平成５年度青年部活動実績（H5.1.1～H5.12.31）

月日	事項	活動内容	場所
1.10	定例会		漁協会議室
1.13	研修会	県漁村青壮年婦人グループ活動実績発表大会	鹿児島市
	新年会		〃
2.18	定例会		漁協会議室
3.1	環境保全	海と渚を守る会発足（天然石鹸の使用）	鹿児島市
3.3	研修会	全国実績発表大会出席（久木留部員）	東京
3.5	港まつり	港まつり打ち合わせ	漁協会議室
	定例会		〃
3.15	環境保全	海と渚を守る会署名運動展開	漁協管内
	会議	いきいき漁村づくり協議会	漁協会議室
3.21	県漁青連	役員会	鹿児島市
3.23	研修会	西薩地区漁村青壮年情報交換会	串木野市
3.24	漁港清掃	漁港クリーン運動	江口漁港
3.26～27	港まつり	港まつり魚準備，吾智網研修会	〃　，他
3.28	港まつり	第１回ふるさと港まつり	江口漁港
4.7	県漁青連	役員会	鹿児島市
4.10	定例会		漁協会議室
4.23	県漁青連	役員会，通常総会	鹿児島市
5.10	放流事業	ヒラメ放流 15,000尾	漁協地先
	定例会		漁協会議室
5.25	研修会	西薩地区水産業改良普及事業推進協議会他	串木野市
5.27	環境保全	海と渚を守る会署名提出	
6.12	定例会		漁協会議室
6.15	放流事業	マダイ放流 50,000尾	漁協地先
7.6	県漁青連	役員会	鹿児島市
7.10	定例会		漁協会議室
7.13	視察研修	先進地視察計画打ち合わせ	〃
7.21～23	視察研修	マダイ延縄漁法及びマゴチ種苗生産研修	熊本県五和町 福岡県豊前市
8.10	漁港清掃	漁港クリーン運動	江口漁港
	定例会		漁協会議室
8.13	交流会	西薩地区青壮年ソフトボール大会	東市来町
8.27	県漁青連	役員会，県漁青連リーダー研修会	鹿児島市
10.9	定例会		漁協会議室
11.10	定例会		〃
12.3	漁港整備	漁港周辺興対策調査への協力	江口漁協周辺
12.12	総会		鹿児島市
	忘年会		〃

3　活動の実践及び成果

それでは主な活動を２～３紹介したいと思います。まず，毎月１回開催している定例会ですが，この定例会は以前は２カ月に１回程度の開催でしたが部員間の連携の強化と漁業操業上の問題の早期解決のために平成３年から毎月１０日前後に開催しています。定例会では，各種行事への参加のこと，定例清掃の打ち合わせのほか，漁業調整等の問題から漁協施設の改善，漁港を利用する遊漁者の対策，魚価安定対策のための流通問題などについてみんなで話し合い，その結果を取りまとめて，組合に対して青年部の意見として提言しております。組合も我々の意見を真剣に取り上げてくださり，それにもとづき各種調整や問題解決のための対策を協議し，いろんな問題の円滑な前進に努めていただいております。

つぎにふるさと港まつりの参加についてですが，以前は東市来町の未来を語る会が主催で，「こけけ王国サンドアートフェスティバル」としてグルメコーナーや活魚販売等を中心としていましたが，平成５年から漁協などで組織する実行委員会が主催する「ふるさと港まつり」として開催されております。今では，活魚・海産物特産市や捕れたての魚を料理したグルメフェスティバル，地元農産物特産市，漁船機器メーカー展示，芸能発表など盛りたくさんの催しがあります（図３）。その中で主に青年部が中心になって活躍しているのが２つのイベントです。１つは，新船披露式で，大漁旗で飾り付けられた組合員の新船が披露され，餅まきや新船の体験乗船などが行われます。また，まつりのメインイベントとなっているのが，魚のつかみどりで，その準備はつかみどり用の魚の確保から会場設営，つかみどりの開催まですべて部員で実施しております。年々参加者も多くなってきており準備も大変ですが，遠くから出かけてきてくださった観光客や近くの町内の人たちが，元気に魚を追いかける子供たちに大きな声援をかけてくださり，心がなごみ，日頃の漁の苦労も忘れてしまいます。しかし，一方では，近所に住んでいる子供でも，前浜で捕れたマダイ，アジ，マゴチやカイワレ等の魚の名前を知らないのには正直驚きました。最近は，自然とふれあう機会が少なくなったと言われておりますが，このようなイベントを通じて，少しでも子供たちが魚を身近なものに感じてもらえるように願わずにはいられません。このような色々な出会いがありますこの港まつりは，地域と一体となった地元水産業のＰＲができ，子供からお年寄りまでがわれわれ沿岸漁業を理解してもらえるいい機会だと思って，今後も子供たちとの稚魚の放流体験など色々なアイデアを出しながら，より以上に喜んでもらえる港まつりが出来るよう積極的に参加していきたいと考えております。

図３　港まつりプログラム（第２回）

こけけ王国ふるさと港まつりプログラム

開会式

新造船入港披露式
　新造船　太賀丸
　　　　　國吉丸
　　　　　翔洋丸

魚のつかみ取り大会（小学生以下の子供対象）２回

芸能発表
　踊り
　歌謡ショー
　ギター漫談
　カラオケのど自慢大会

グルメフェスティバル

活魚・海産物特産市

漁船機械展示

江口漁港の歴史写真展

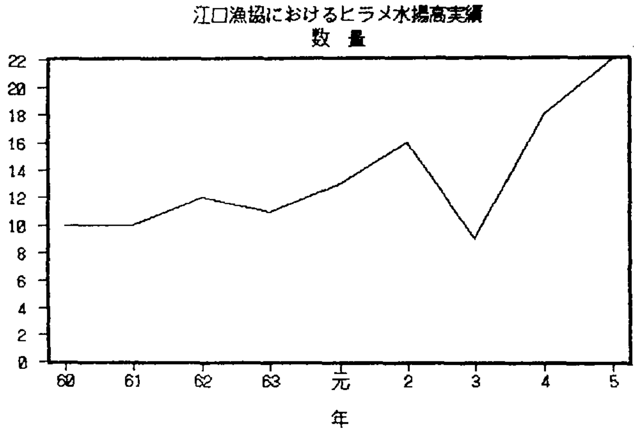
閉会式（お楽しみ抽選会）

チリメン振興会賞	チリメン詰め合わせ	５組
江口漁協長賞	ヒラメ２匹	１組
港まつり実行委員会長賞	マダイ３匹	１組
こけけ王国賞	秋太郎１匹	１組

最後にヒラメの資源管理事業の参加についてですが，近年漁獲が減少している中にあって，冬場のヒラメ資源は大変重要となっております（表３）。以前から漁協単独の種苗放流等は実施していましたが，さいわい平成２年から広域パイロット事業も始まり大いにその成果を期待しているところです（表４）。事業の推進については，青年部が中心となり種苗放流を行い，その後の放流効果の把握に努めております。昨年は部員による放流魚の漁獲状況調査を普及所の指導を受けて実施しました。調査についてはあまりこまかい調査は船上では無理なので，野帳に水揚日毎の放流ひらめの漁獲量と漁場，総漁獲尾数等について記帳しました。調査結果については，（表５）にありますように１月～３月までの合計では，高い部員では重量で14.2%，平均でも 5.2%の混獲率でした。平成５年の漁協全体のヒラメの水揚げは，数量で２２トン，9,478 万円でしたので，これを単純に放流ものの水揚げに換算しますと，約1,140 kg，金額で約５００万円となります。これは我々部員が放流ものとはっきり確認できたものだけの数字であり，実際はもっと高い効果があると感じています。このように最近ヒラメの水揚の中に放流物が多いという部員の感触を裏付けるような放流効果があることがわかって参りました。ヒラメの放流効果についてはだれしも認めるところですので，今後も種苗放流を継続するとともに，さらに効果を高めるために昨年漁協で整備した中間育成施設を利用し，より大きな種苗を放流するために中間育成をどんどん実施して行かなければと思っています。将来的にはヒラメ水揚金額から種苗経費として天引きするようなヒラメ貯金ができればと話し合っているところです。また，昨年漁協にヒラメ等の幼稚魚の保護のために県単事業で育成礁を設置していただき，その場所は禁漁とするよう働きかけて，禁漁区としていっさいの漁業は禁止しています。また，育成礁付近にミズイカ用の産卵用イカシバの投入も話し合っているところです。そのほかヒラメ刺網の操業期間や場所割についての取り決めやヒラメのサイズの規制等を実施し，資源管理によるヒラメ資源の維持・増大を目指しております。

表３　江口漁協におけるヒラメ水揚高実績（市場年報）

年	６０	６１	６２	６３	元	２	３	４	５
数量(トン)	１０	１０	１２	１１	１３	１６	９	１８	２２
金額(千円)	43,864	40,267	45,400	47,332	55,688	71,120	37,132	64,507	94,780



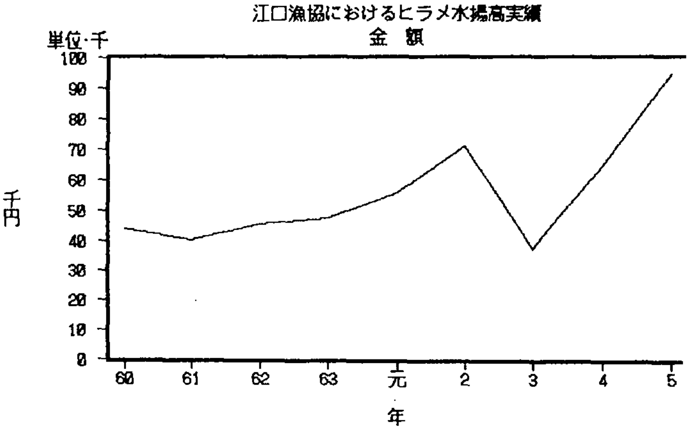


表4　江口漁協におけるヒラメ放流実績

年	57	58	59	60	61	62	63	元	2
尾数(千尾)	(単)1.2	(単)3.5	(単) 5	-	(放) 9	(放)11	(放)5.2 (豊)20	(豊)20	(広)15

年	3	4	5	6
尾数(千尾)	(広)15	(単) 4 (広)15	(広)15	(単) 2 (広)15

＊(単)：町又は漁協の単独事業
(放)：放流技術開発事業（国庫）
(豊)：豊かな海づくり事業（補助）
(広)：広域栽培パイロット事業（国庫）

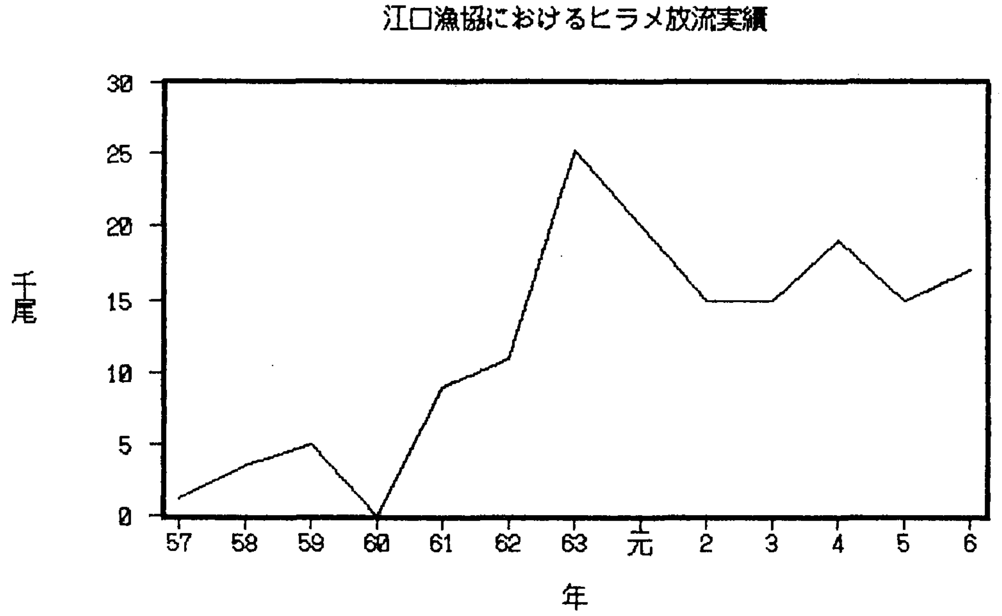


表6　標本船日誌の記帳状況と記帳時の放流ヒラメの混獲状況（[illegible]）

漁船名	1月			2月			3月			計			記帳時における混獲率
	水揚日数 水揚量	記帳日数	記帳時の放流ヒラメの混獲状況	水揚日数 水揚量	記帳日数	記帳時の放流ヒラメの混獲状況	水揚日数 水揚量	記帳日数	記帳時の放流ヒラメの混獲状況	水揚日数 水揚量	記帳日数	記帳時の放流ヒラメの混獲状況	
A丸	１９日 314.4kg	−	−	１３日 319.2kg	3	2.4／99.1	１８日 328.2kg	3	3.9／73.9	５０日 961.8kg	6	6.3／173	３.６％
B	１７ 415.6	6	10.4.／230.3	１２ 361.0	１２	15.4／361	１５ 344.3	１２	13.4／298.4	４４ 1,120.9	３０	39.2／889.7	４.４
C	１５ 367.8	−	−	１３ 344.0	−	−	１５ 404.2	−	−	４３ 1,116	−	−	未記帳
D	１７ 337.4	×	×	１４ 259.4	×	×	１６ 241.5	×	×	４７ 838.3	×	×	未回収
E	１４ 373.5	×	×	１４ 373.8	×	×	１２ 298.1	×	×	４０ 1,045.4	×	×	〃
F	１３ 342.1	3	3.5／279.3	１１ 431.0	5	3.9／290.9	１５ 330.2	3	2.6／80.4	３９ 1,103.3	１１	10／650.6	１.５
G	１３ 346.4	−	−	１１ 382.6	4	7.3／215.8	１５ 391.1	4	7.2／76.3	３９ 1,120.1	8	14.5／292.1	４.７
H	１７ 272.9	−	−	１５ 310.6	2	2.4／46.4	１１ 219.8	−	−	４３ 803.3	2	2.4／46.4	５.２
I	１３ 270.9	4	13.0／147.9	１２ 308.0	5	7.4／133.2	１１ 273.2	5	8.7／193.6	３６ 852.1	１４	29.1／474.7	６.１
J	１６ 226.7	1	4／47.2	１３ 151.2	2	1.7／35.2	１５ 98.9	2	1.6／20.6	４４ 476.8	5	7.3 ／103.2	７.１
K	１２ 241.1	2	1 .4／65	１４ 269.6	6	13.2／128.1	１４ 278.8	5	32.2／137.5	４０ 789.5	１３	46.8／330.6	１４.２
計		１６	32.3／769.7		３９	53.7／1309.7		３４	69.6／880.9	３３５日	８９	155.6／2960.3	５.２％

└── 放流魚重量（kg）／漁獲量（kg）

4　今後の課題

このように我が青年部は，本業の漁業はもとより各種活動に積極的に取り組んでおりますが，漁業を取り巻く環境はますます厳しくなっております。今期のカジキ漁などは，漁期の前半のわずか２～３日間だけの大漁でした。そして，魚の価格は二束三文で，我々部員も一同がっくりしました。昔から漁師は大漁貧乏といいますが，何とかできないかと部員同士で協議し，漁協に間に入ってもらい，どうにか仲買人と調整し，秋太郎の大漁をと期待していましたが，それ以来秋太郎の来遊はなく，さっぱり獲れませんでした。今回はせっかくの話合いも功を奏することは出来ませんでしたが，このような話合いや結束力は今後の地域漁業発展の活力になるものと信じております。

また，昨年来の魚価安の問題のような一漁協等では解決できない大きな問題もありますので，県漁青連や，県漁連等の系統団体及び県，町等の行政組織で，漁業を取りまく全体の問題として協議していただき，漁家経営の安定を図っていただきたいと思っております。加えて，漁場環境の大きな問題として海砂の問題があります。本来海砂は，採ってもらいたくないというのが，漁業を受け継ぐ者の気持ちです。しかしながら，一方では砂がなければ港も道路も出来ないという現実がありますので，できるだけ自然環境保全や魚介類への影響が少ないよう留意した採取となるよう今後とも要望していきたいと思います。

今後は，地域での活動の輪をひろげるため，チリメン振興会の後継者にも加入を呼びかけ，地域一体となった活動を実践するとともに，今後とも吹上浜の海の恵みと豊かな自然を大切に守りながら，地域漁業の振興のために我々江口漁協青年部はがんばって参りたいと思います。

「とうちゃん，こん魚はなんけ？」
－ ヒラメ生餌一本釣りに取り組んで －

黒之浜漁協青年部　福浦三則

1　地域と漁業の概要

阿久根市黒之浜は，阿久根市の北西部に位置し，以前は本土から長島を経由して天草方面へ渡る渡船場として賑わいましたが，昭和４９年，黒之瀬戸大橋が開通した後は，純漁村として静かなたたずまいを見せた集落となっています。目の前に日本三大急流の一つに数えられる黒之瀬戸があり，豊かな海の幸をもたらしています。

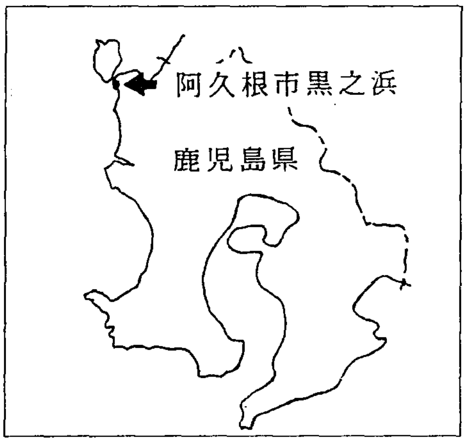


図１　位置図

黒之浜漁協は，正組合員２２５名，准組合員１８５名，計４１０名，漁船数２９６隻で，中型まき網・棒受網・ごち網・磯建網・潜水業など，いろいろな漁業種類があり，平成５年度の漁協市場販売取扱高は，２７３トンで３億８千万円，他港水揚げが，１３億８千万円となっています（表１参照）。

表１　黒之浜漁協年度別取扱い実績

項目　　年度	元	2	3	4	5
数量（トン）	３３６	３４３	３４３	３１５	２７３
金額（百万円）	４０３	４３４	４４５	４３４	３７８

（黒之浜漁協総会資料より）

2　青年部の活動

黒之浜漁協青年部は，知識と技術の修得を目的として昭和６０年に発足しました。部員は４０歳以下の意欲のある者で構成されています。現在，部員は１０名ですが，一致団結して，藻場造成やイカシバ投入，先進地視察研修等，これから先を考えた活動に取り組んでいます（表４参照）。

また，地域の祭りへの協力や阿久根市水産教室においては，地元中学生を対象にロープワークや手旗信号の指導など，地域の活性化や漁業後継者対策にも取り組んでいます。

私自身は，昨年まで青年部長を務めており，現在も引き続き県漁青連の監事をしております。漁青連においては，各単協青年部役員と知り合う機会があり，幅広い人間関係と多くの情報を得ることができます。

3　ヒラメ生餌一本釣りへの取り組み

(1)　ヒラメ生餌一本釣り導入の経緯

私は，以前からヒラメの曳縄釣りについては，知っておりました。また，ヒラメの生餌一本釣りについても話に聞いたことがありました。しかし，実際に操業に取り組んだのは，それから数年後の話になります。

昭和６１～６２年は，カワハギのすくい網が最盛期であり，特に他の漁業に取り組

むことは，考えていませんでした。

ところが，そのすくい網もやや下火になってきた昭和６３年の冬のある日，４歳になる息子を連れていつものように阿久根沖ですくい網の操業をしていました。その横で息子は，釣りをしておりました。息子は，釣りが好きで，３歳の頃から天気の良い日には，私と沖にでておりました。息子は，サバやカワハギの切り身を餌にアラカブなどを釣っておりましたが，急に大きな声で，「とうちゃん！とうちゃん！こん魚はなんけ？」と聞くのです。私は，忙しく「わかった，わかった，ちょ待たんか。」と言って，釣れた魚を横目で見ると，なんと６０センチばかりのヒラメでした。私は，びっくりして，操業の手を止め，タモを取り，「ちょ待て，そんままやっど。」と言って，そのヒラメをすくいあげました。切り身の餌にエソが食いつき，それをヒラメが，飲み込んだもので，サイズは，１．２キロあり，私は，せっかくなので息子に食べさせてやろうと思いましたが，息子は，じいちゃん，ばあちゃんに説得されたようで，翌朝市場に出すと言いました。年末でもあり，そのヒラメは，７，２００円の値がつきました。息子は，突然のおこづかいに大喜びでした。その顔は，今でも忘れません。

また，その後，すくい網の水揚げが，さらに少なくなりつつあり，ここで何か考えなくてはと思っているときに，すでに数年前からヒラメの曳縄や一本釣りに取り組んでいた青年部の仲間から，「ヒラメは高級魚なので，けっこういい仕事になる。」と一本釣りの話を聞きました。

このようなことがきっかけで，息子に先に釣られた悔しさと阿久根沖でのヒラメの大漁を期待して取り組み始めました。

平成元年には，青年部の視察で宮崎県の川南町へこのヒラメ生餌一本釣りの研修へ行きました。川南では，豆アジを餌に魚礁周辺での操業であるとのことでした。

平成２年から本格的に操業を行いましたが，はじめは，エソ，エソ，エソとエソばかりでした。時々，仲間の船に着けて，食いかけの餌の歯形を見てもらい，説明を聞き，少しづつ自信をつけていきました。４歳の息子に釣れて自分に釣れないことはないと思いながら頑張りました。初めて，ヒラメを釣りあげたときは，本当に嬉しかったです。道具は簡単ですが，実際釣りあげるのは難しいと実感しました。

その後，青年部の仲間とともに情報交換を行い，漁場を開拓しました。さらには，翌年の平成３年には，地域の一本釣り業者にも広まり，かなりの量のヒラメがこの一本釣りであがっています。

(2)　漁具・漁法について

漁具は，図２に概略を示してありますが，特に難しいものではありません。

餌は，大きさ１０～１５センチのマイワシ，カタクチイワシ，豆アジ等を使用します。私の場合は，東町の籠船からイワシを購入しています。

操業方法は，トモ帆を張り船を風に立てて潮で流します。オモテとトモから１人２本の道具を出し，オモテは，竹竿に引っかけておきます。魚探を入れてキビナ，イワシの反応のあるところを重点的に流し，アタリがなければ漁場を移動します。餌のイワシはこまめに活きのよいものと取り替えます。アタリは最初スーと重くなるのでこの時，糸がたるまないよう，また負荷のかからないよう，糸をくれ大きな引き込みがきてからあげます。取りあげは，タモですくいあげます。

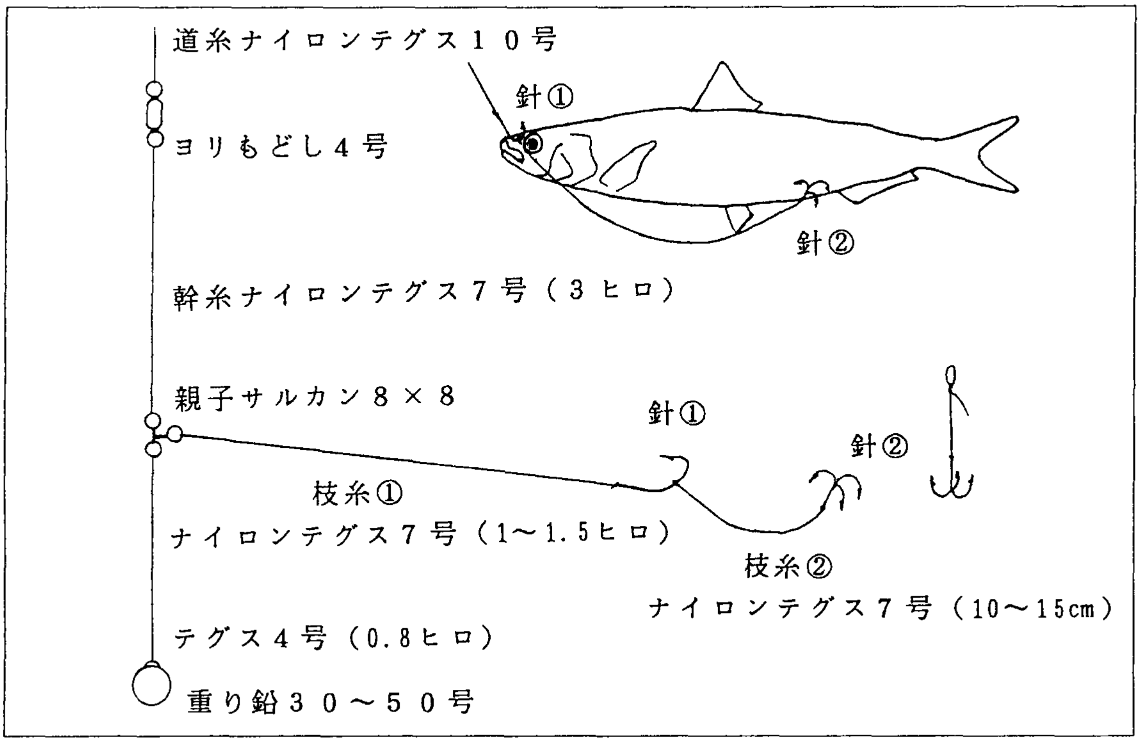


図２　　漁　具　図

表２　漁具構成

名　称	材　　質	規格・寸法	数　　量
道　糸	ナイロンテグス	１０号	５０ｍ
幹　糸	〃	７号	４．５ｍ
枝　糸	①　〃 ②　〃	７号 ７号	1.5～2.0m 10～15cm
釣　針	①　鋼 ②　〃	アジ針１２号 三又針　８号	１本 １本
重　り	鉛	３０～５０号	１個

(3)　生餌一本釣りの効果

ヒラメの水揚量は，生餌釣り導入により，徐々に増加傾向にあります（図３参照）。網によるキズもなく，活魚出荷により単価も上がりつつあります。なかなか簡単には釣れませんが，午前中１枚も釣れずに午後からの２時間くらいで１８枚釣れたこともありました。

また，このヒラメ釣りを通してたくさんの人と交流できました。野間池漁協へ行ったり，錦江漁協の青年部長が乗船研修に来られたりしました。

昨年も西薩普及所の依頼で川内市漁協へ説明に行きました。川内の方々は，自分達

が放流したヒラメを他県の人たちに釣られるのは残念なので，頑張って釣りたいとのことでした。実際我々の漁場も，私達が取り組むまでは，他県船が来て操業をしてました。しかし，我々，１８隻前後で集団操業をするようになってからは，あまり来なくなりました。

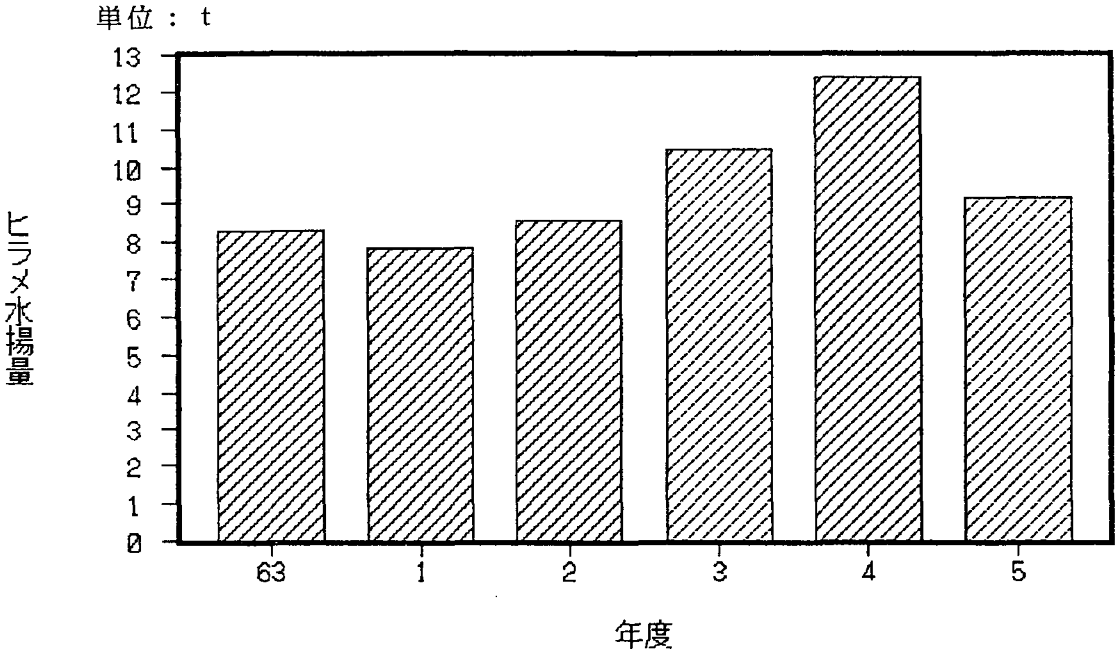


図３　黒之浜漁協ヒラメ水揚量の推移

遊漁船業を取り入れた漁業経営

私は，漁業を営む傍ら，土・日を中心に遊漁船業にも取り組んでおります。専門は一本釣りですが，時期によっては，棒受網漁業に従事しており，寝る暇もないこともあります。

主なお客さんは，６月から８月にかけてのタコ釣りがほとんどですが，アラカブやヒラメ釣りにも案内しています。先ほどのヒラメ生餌釣りも，遊漁者向けの釣り情報誌に載り注目をあびました（図４参照）。

遊漁者というと，マナーが悪いとか，漁場を荒らすなどの悪いイメージが先に浮かびますが，私の遊漁船業に対する考え方は，漁師である私がやっているからこそ，海の上のルールを教えることができますし，マナーについても注意ができます。まして，他の漁業者とのトラブルなど起こさないように，常に心がけています。

また，静かな漁村においては，自然とふれあうなかで地元のＰＲにより，地域の活性化も図られると思います。さらには，自分自身，仕事の変化により気分転換にもなります。

遊漁者は，海に開放感を求めて来ていると思います。ストレスの多いこの時代に仕事の疲れをいやしに来ています。私は必要以上に釣らせることはありませんが，それでもお客さんは喜んで帰ります。

これからは，限りある資源をいかに有効に利用し，生計を立てていくかが問題になってきます。禁漁区や時間制限等の取り決めをしながら，各地域にあった，遊漁船業を取り入れた漁業経営というのも考えてみてはどうでしょうか。

5　今後の課題

水産業をとりまく環境は，年々厳しくなっていますが，生き残りをかけていろんなことに取り組む姿勢が必要だと思います。

ヒラメに関しても，体長制限等の指示を守り，地元での話し合いによりさらに資源の保護を考えるべき時期に来ております。

それから，放流事業にさらに積極的に取り組んでいただきたいと思います（表3参照）。青年部で中間育成を行い，さらに放流効果をあげることができればと考えています。息子が漁業を継ぐかは，わかりませんが，息子が私より先にヒラメを釣ったように，孫が息子より先にヒラメを釣ることを夢見ています。どうか，その時にヒラメがいなくなってしまったということのないよう，みんなで協力して考えていかなくてはならないと思います。

表3　黒之浜漁協ヒラメ放流実績

年　度	元	2	3	4	5
数量(尾)	12,000	25,000	40,000	30,000	82,000

6　おわりに

私のような名もない漁師がこのような発表の機会をいただき大変嬉しく思っています。青年部活動を通じて漁青連にも顔を出し，グループ活動の重要性を感じております。また，多くの人と知り合い話を聞くことによって，いろいろなことを学びました。

青年部の30代，40代の人たちが現在の漁業の中堅であり，ふんばりどころだと思います。私は，厳しい現状の中でも頑張れば何とかなると思い頑張っています。海が好きですし，漁業に誇りを持っています。いつでも，何でもやってやろうという意気込みです。みなさん，お互い，一生懸命頑張りましょう。

表４　黒之浜漁協青年部活動実績

平成５年度事業報告書

自　平成５年４月　１　日
至　平成６年３月３１日

主要活動事項

年月	実施事項	実施内容	場所
５．４	漁青連役員会	部長出席	鹿児島
	漁青連総会	部長出席	鹿児島
	三月十日祭	船団パレード，魚供養	黒之瀬戸海峡
５	役員会	イカシバ追跡調査について	黒之浜漁協
	イカシバ追跡	ビデオ撮影	番所鼻，八郷
６	藻場造成試験	マフノリ母藻採取	東町小島地先
	藻場造成試験	マフノリ種蒔き	漁協西側
	藻場造成試験	ミリン母藻採取	愛宕鼻
	役員会	総会開催について	黒之浜漁協
７	総会	業務報告，計画等	黒之浜漁協
	水産教室		青年の家
８	役員会	お魚祭について	黒之浜漁協
	お魚祭出品物集		
	新鮮お魚祭参加	第３回新鮮お魚祭り	阿久根市漁協
	漁青連役員会	部長出席	鹿児島
９	地区交流会	北薩地区漁協青年部スポーツ大会	長島町
	役員会	先進地視察研修について	黒之浜漁協
10	先進地視察研修	ヤマハ八代，熊本県水産センター	八代，大矢野
11	漁青連現地研修		東町
	恵比須祭	旗立て作業	金比羅山
12	藻場造成試験	ミリン沖出し	八郷
	新年準備作業	しめ縄作り，旗立て作業	金比羅山
６．１	県漁業振興大会	実績発表大会	鹿児島
	新年会		
２	水産教室閉講式		阿久根市漁協
３	役員会		黒之浜漁協
	藻場造成試験	マフノリ，ミリン追跡調査	漁協西側八郷

（黒之浜漁協青年部総会資料より）

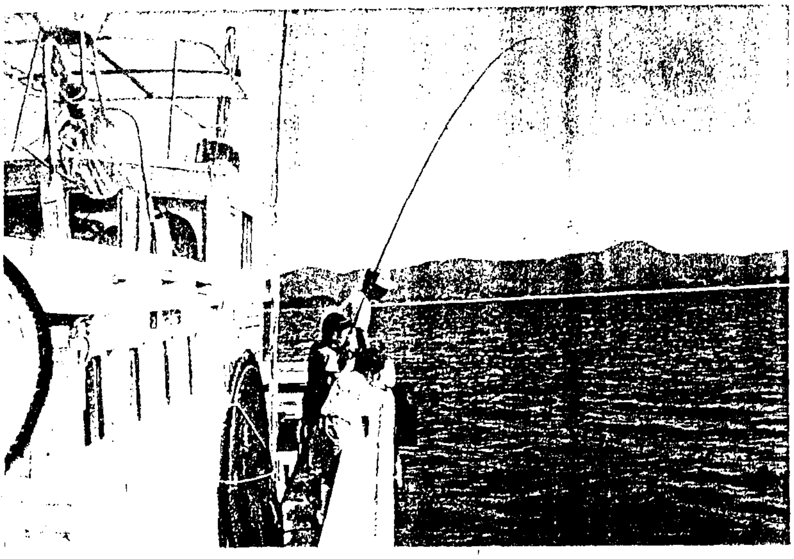
▶いやはや!? 大人顔負けの良型ヒラメは、レッキとした福浦まもる君の釣果

福浦船頭に来た大型エソの取り込み
▼を終えたまもる君が、ハイ一枚！

[illegible]借りをしこいたまもる君は
▼返却するとすぐに手釣りに切りかえる

カメラマンの構えたカメラに向って、キュッと
▼顔を引き締めるさおりちゃんとまもる君

〝何が来たかな?〟と、海面
▼をのぞき込む親子三人組



足らずの脇本湾口でアタックを開始。一投、二投…闘志満々の牧尾社長が〝来たッ!!〟早い魚信にこちらはタジタジ。竿は大孤を描き、時々横走りを繰り返している。丹念にゆっくりと取り込んだのが上の記念すべき一枚。その後魚信はあるが、なかなか食い込んでくれない。ハマチ、大型のエソなど次々とキープ。そして待ちに待ったヒラメの魚信が、事もあろうにまもる君に来た。手を貸す事もなく船頭の指示通りに送り込み、十分な間をおいて竿に乗ってから大合わせ。カッチリとハリ掛かりした。（モノクロ43頁へ続く）

南九州のHOTなフィッシング情報満載!!
'93 11
釣恋人
NOVEMBER.

図４　「釣恋人」平成５年１１月号より

小型底曳網漁具の改良に取り組んで

志布志漁協小型底曳業者会　丸　山　雅　英

1　地域と漁業の概要（図１，２）

私の住んでいる志布志町は，大隅半島東部の志布志湾のほぼ中央に位置し，中世から港町として栄え，江戸時代には「志布志千軒の町」とうたわれるほど繁栄していた。

近年は，昭和４４年には重要港湾に指定され，大規模な港湾整備が行われ，今では巨大な飼料サイロが建ち並び，大型船が行き交う国際港へ変貌しようとしている。

私の所属する志布志漁協は，志布志町と有明町の２つの町にまたがっており，正組合員１６１名，准組合員２３名の計１８４名からなり，バッチ網，小型底曳網，建網，キスまわし刺網などの網漁業が盛んである。平成５年度の水揚げは，９１１トン，３億５千万円で，このうち小型底曳網が半分くらいを占めており，主力漁業となっている。

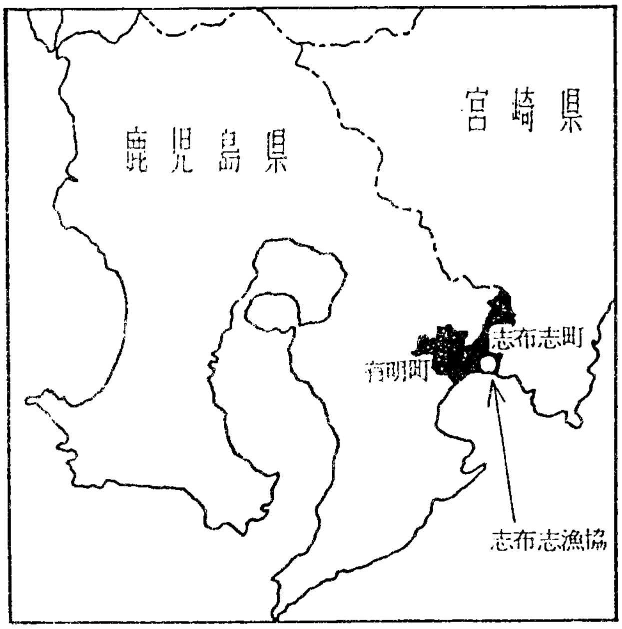


図１　位置図

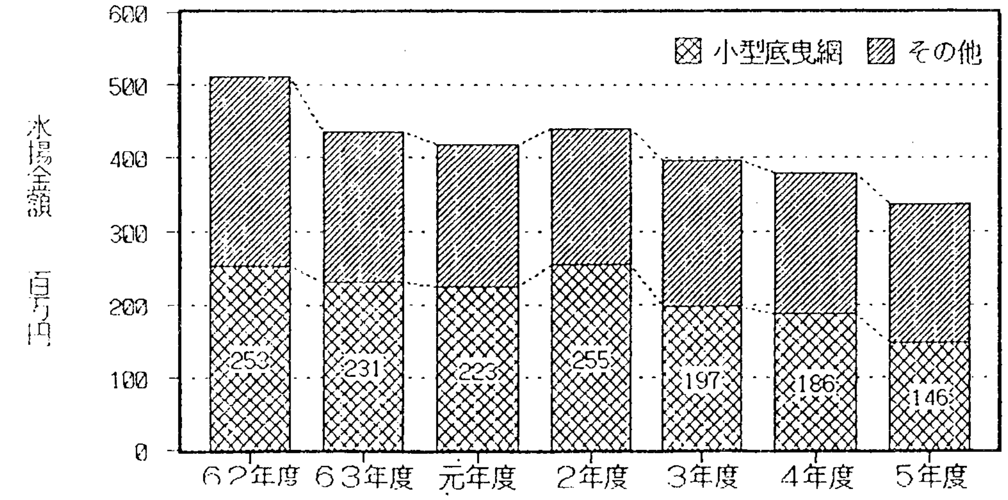


図２　志布志漁協水揚げ金額の推移

2　グループの概要

志布志には，親睦を深めることを目的に昭和５４年に結成された底曳青年クラブがあったが，若者だけの集まりであったので底曳業者全体でまとまった会を作ろうということになり，平成元年に小型底曳業者会が発足した。小型底曳２５統中２３統が加入しており，月３千円の会費で運営されている。主な活動は年数回の定例会で，違反操業の防止につとめたり，資源管理などの学習会を実施している。また，ヒラメ放流及び標本船調査，クルマエビの中間育成，枇榔神社清掃，先進地視察なども行っている。昨年は初

めての試みとして仲買業者との話し合いの場を設け，認識を深め合った。その結果，クルマエビやヒラメなどはいままで漁協の活魚水槽に入れ，一括して入札していたものを生産者がそれぞれ発砲スチロール箱に入れて出荷する形にしたところ，入札する仲買業者が増えて，価格が上がった。このように地道な活動であるが少しでも底曳業者のプラスになるように考えて活動している。

3　課題選定の動機

私の父は，志布志湾でアシアカが大量に獲れると聞き，昭和３５年大分県佐伯市から移ってきた。そして３７年から小型底曳網の許可を取り操業している。現在操業中の半分の人はそのようにして県外から移って来た人たちである。私は昭和５０年鹿児島水産高校を卒業して２年半ケミカルタンカーで働いた後Ｕターンして，念願の底曳網漁業を開始した。兄もそれから数年後にＵターンし，父の船に乗って操業するようになった。一昨年１０月から，父は私と乗るようになり，兄が一人乗りとなって操業している。私は１０数年間底曳をやっているが，網の改良については，水揚げを増やすために部分的にちょっと変える程度であった。しかし，業者会として昭和６２年頃から島根県や宮崎県に漁獲物とゴミが分離できるという二段袋方式の網を視察し，また，試験をしたが，結局普及するまでに至らず，私自身も「こんな網の作りもあるのか」といった程度だった。ところが平成４年，愛媛県上灘漁協に業者会で視察旅行に行ったとき偶然浜で底曳網を見て「この網は良い。志布志に導入できる」と直感し，兄も同様の感想を持った。そこで，翌年に父を含めた３人の底曳業者が県の技術交流事業で再度詳細に研修を受けた。その結果，網の大きさや構造から安定性が良いと考えられたのはもちろん，それ以上に漁獲物の活きが良いのに父は驚いていた。私はそれまで「ハモ殺しの雅英」と呼ばれていたので，活魚主体の上灘漁協の底曳網を導入すれば活魚が増え，低迷している魚価アップにつながり，漁業収入が向上すると思い，早速父と共に網の改良に取り組んだ。

4　活動の状況と成果

(1) 小型底曳網の操業について

志布志の底曳網には，一人乗りと親子で乗る二人乗りがある。二人乗りは，朝水揚げが済むと家で朝食をとった後，食糧を積み込んですぐに出漁し，沖で交替で睡眠をとりながら次の日の朝まで操業する。一人乗りの場合は，夜曳と昼曳があり，夜の場合は昼から出漁して朝までの操業，昼の場合は朝出漁して夜までの操業となる。休漁日は，第１と第３日曜日に市場が休みのためその前日の土曜日が休漁となる。志布志は外海に面しているため出漁できない日も多く年間出漁日数は，１５０～１８０日程度である。曳網時間は，４～５時間くらいで，主な漁獲物は，時期によりかわるが，イボダイ，ウチワエビ，ハモ，エソ，甲イカ，タイ，ヒラメなど多種多様の底着性の魚介類が揚がる。（図３，表１）

(2) 底曳網の改良（図４）

底曳網は，袖網，天井網，袋網，魚捕部からなる。志布志湾では，魚と一緒に石，流木，竹，ゴミ，貝，カニ，ヒトデなどが入る。従来の網だと魚捕部に入った漁獲物はゴミや泥にもまれた状態でスレて，体表の粘液がはがれてしまい活魚ではほとんど出荷できず，また鮮魚としてもランクが下がる品物となる。しかし，ハモは活魚単価が高いため（図５），ハモ時期だけは，曳網時間を短くして普段の半分以下の２時間程度で網を揚げていた。それでも半分は曳き殺していたし，活きているハモも弱っているものが多く船の活間で死んでしまうことも多々ある。ハモは，京都祇園祭りまでは値が高く，活魚は大きさによってキロ２，３千円することもあり，鮮魚の５倍く

らいの価格である。そこで，ハモの活魚率向上が２段網の導入により最も改良されるのではないかと思った。視察から帰ってから早速改良網の作成に取りかかり平成５年７月から改良網で操業しはじめた。

特に従来網と違っているのは以下の通りである。

(1) ビームの取付位置

(2) デグス網の使用

(3) 魚捕部の２段袋方式

最初は，重りやアバの調整などで手間取ったが，その後は通常の時となんら変わりなく操業できた。水揚げも従来網の人と差は見られず，網はこれで落ちついたと思った。数年前に導入で苦労していたのがうそのように漁獲物とゴミは分かれ，ゴミはほとんど下袋にあり，魚などは８割くらいが上袋に入り，非常に活きが良いのには驚いた。図６と表２に改良前の平成４年からのハモの水揚げ量と活魚の水揚げ量を示した。平成４年の７月は半分くらいの活魚率であった。ハモ狙いの短時間操業をした８，９月でも活魚率は６割であった。１０，１１月にはいって再び通常の操業に戻ると活魚率は半分以下となった。平成５年６月も前年同様の活魚率だが，改良網を導入した７月には，早速効果が表れ活魚率は７割になり，８月から９月にかけてハモ狙いの操業に入ると実に９割にも活魚率がアップし，ほとんどのハモが活きているという信じられない結果になるとともにこの網の効果を確信した。その後通常の操業になっても活魚率は７割前後で推移し，６月から１１月までの６ヵ月間の活魚率は７７％になり，水揚げ金額も４０万円くらいアップし，早速成果が表れた。今年になってハモの値段が安かったため，ほとんど通常の操業をしていたが，それでも活魚率は７割前後で推移している。９月に活魚率が半分に低下しているのは，台風が沖を通過しうねりがあった時に操業してハモが大量（２日間で２８０ｋｇ）にのったためで，この２日間を除けば，活魚率は６割となる。このように改良網を使用するようになって改良前と比べてみると２割くらい活魚率がアップした。また，ハモ狙いの短時間操業をすれば，９割くらい活魚で出荷できる自信がついた。

今年は，私を含め３名の業者が改良網を用いている。そこで６～１０月までの生産者別一月当たりのハモ漁獲量と活魚率を図７に表した。改良網のハモ活魚率の平均は６５％で，活魚率が５０％を下回ることは一度もなかった。従来網の平均は５０％で，半分は殺している状況であった。ハモを狙って短時間の操業をしても改良網の方が活魚率に優れていることがわかった。

改良に取り組んだ結果として，次のような予想以上の成果が得られた。

ア ビームを直接アバ網に取付けたことで，網がよく立っているようである。志布志のビームはただ網口を広げるためのものだが，取付位置を変えることで網口を広げるばかりでなく，網を立たせる効果もあり，網の構造がいきてくるようである。

イ テグス網を袋網部分に使用することで水切りが良く，網の通りが良くなったようである。心配されたカマスが目を刺すことはほとんどなく，他の魚種が刺すこともない。全体として水揚げ量は変わらないばかりかかえって増えたようである。

ウ ２段網使用によって，ハモなどの活魚率が大幅に高まったほか，漁獲物の鮮度も良くなった。

エ ゴミとの分別化により選別しやすくなった。人によっては魚捕部が２つあるため，かえって面倒ではと思うかもしれないが，ゴミが完全に分かれているため最初にゴミが入っている下袋を揚げてざっと選別した後に魚ばかりの上袋を揚げて選別することができるので以前のようなゴミの山状態から選別することがなくなり，２度に分けることによってかえって選別しやすくなった。

5　今後の取り組み

底曳網は，その性格から底着性の魚介類を無差別に獲っている。そのため魚種は多種多様にわたり，水揚げせずに投棄する魚介類がかなりある。また，逆に選別に手間がかかる小型魚は，水揚げしても何百円にしかならない。まわりの漁業者から「底曳は根こそぎ獲ってしまう」と悪者扱いされていた。底曳網の性格から仕方がないことと思っていたが，この網を使用するようになって案外網目拡大は可能なのではと思うようになった。なぜならば，改良網では魚類の７，８割が上袋に行くことから下袋の網目を拡大しても水揚げに響かず，選別もより楽になるのではと考えられたからである。そこで１１月の下旬から思いきって下袋の網目を１２節から８節に拡大して操業している。兄の船との比較試験結果を表３に示した。まだ，１０日程度の試験期間であるが，これまでに次のような感触を得た。

(1) 投棄する魚は３分の２くらいに減った。

(2) 今まで網に刺していたウシノシタやアナゴなどは，ほとんど網を抜けるようで漁獲されない。

(3) １０ｃｍ以下の細長い形の魚は網目を抜けるようで圧倒的に少なくなった。

(4) 結果として選別作業が軽減され，３０分もかからなくなった。

(5) 難点は８節の網だとカマスやエソがウシノシタの代わりに網目に刺すようになったことである。

水揚げを他船と比較してみると，小キスが４分の１くらいになり，エソが半分くらいになった。しかし，小キスは単価が２０円くらい，エソは４０円であるから，水揚げ金額全体ではほとんど影響がない。

網目に刺すエソは，胸鰭まで突っ込んでおり取り外しには非常に手間がかかるので，操業中は無視して操業が終わってから頭をちぎって取り外している。そして，このエソは婦人部で雑魚加工している母に渡し，母がミリン干しにしている。

問題はいかに網目に刺す魚を減らすかということと小エビ時期はどうなるかという点である。しかし，実際に操業してみてもうひと工夫すれば十分導入できる手応えを感じている。今後はこのような改良を業者会全体に広めて，より楽な操業で，資源に優しい底曳を目指していきたいと思っている。そのためにも，漁協をはじめ関係機関のご指導，ご協力をいただきながら取り組んでいきたい。

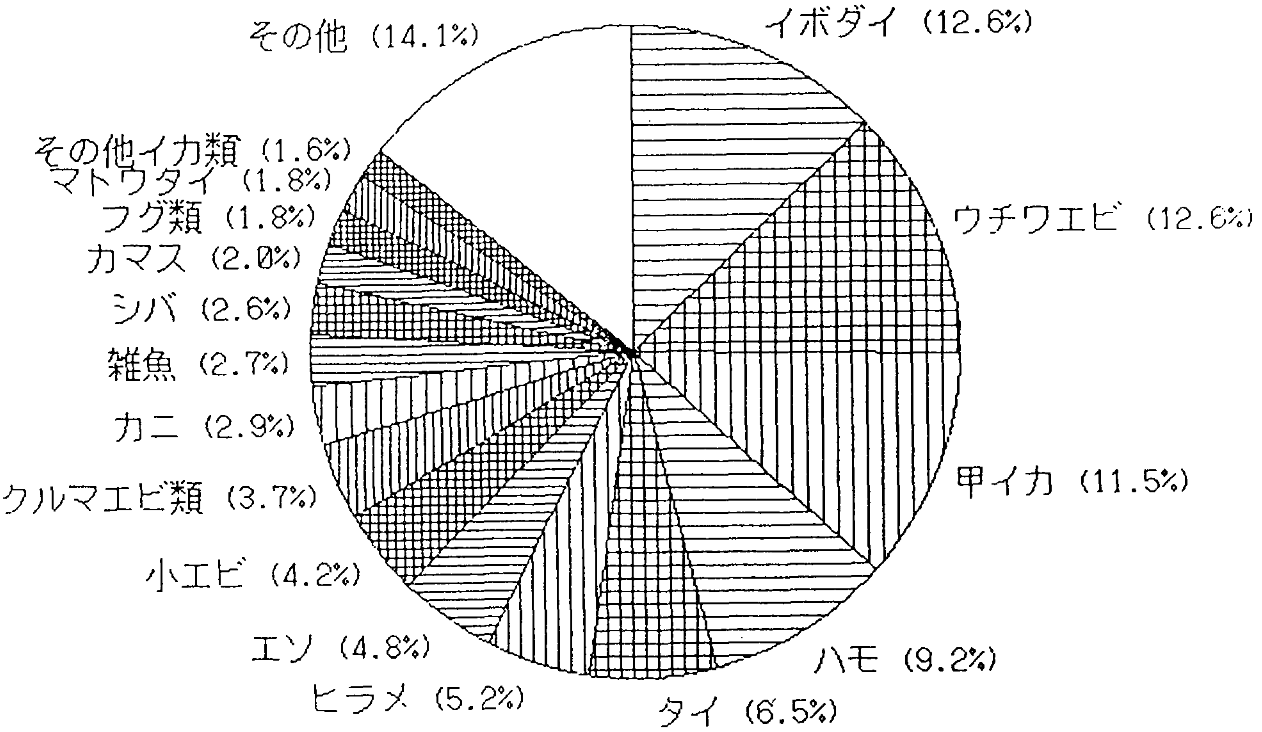
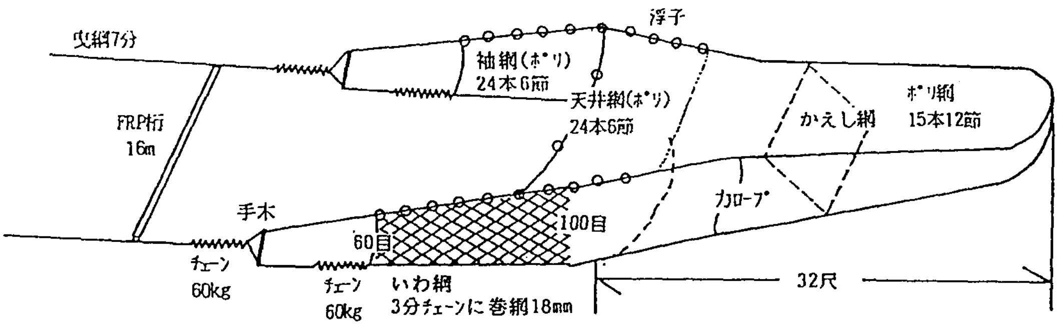


図3　平成5年萬吉丸の魚種構成（水揚げ金額）

表1　小型底曳網の主要対象魚種及び漁期

魚種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
イボダイ	- - -	- - -		- - -				- - -	━━━	━━━	━━━	━━━
ウチワエビ				━━━	━━━	━━━	━━━					
ハモ						- - -	━━━	━━━	━━━	━━━	━━━	
甲イカ	━━━	━━━	━━━	━━━							━━━	━━━
タイ類		- - -	- - -	- - -				━━━	━━━	━━━	━━━	━━━
ヒラメ	━━━	━━━	━━━									━━━
クルマエビ類								━━━	━━━	━━━	━━━	━━━
エソ	━━━	━━━	- - -	- - -	- - -	- - -	- - -	━━━	━━━	━━━	━━━	━━━
カマス									- - -	━━━	━━━	━━━
小エビ			- - -			- - -	━━━	━━━	━━━	- - -		
シマイシガニ										━━━	━━━	━━━

従来の網



改良網

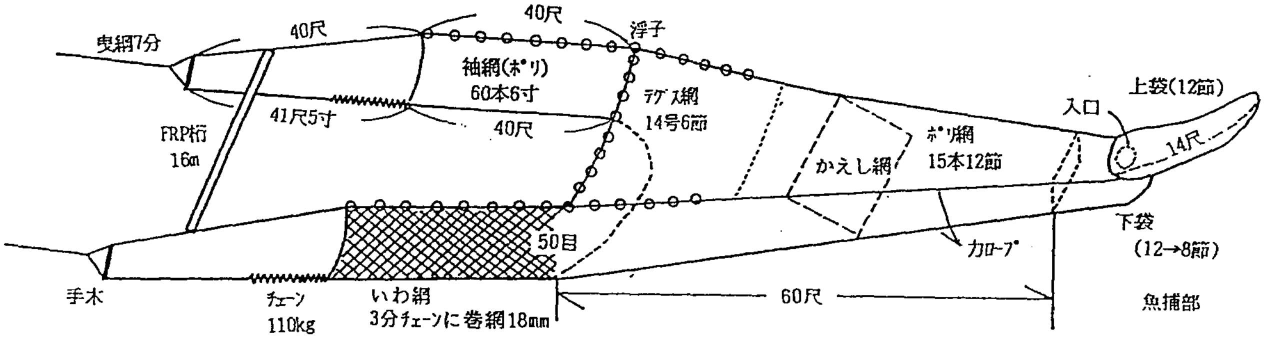


図4　小型底曳網漁具図

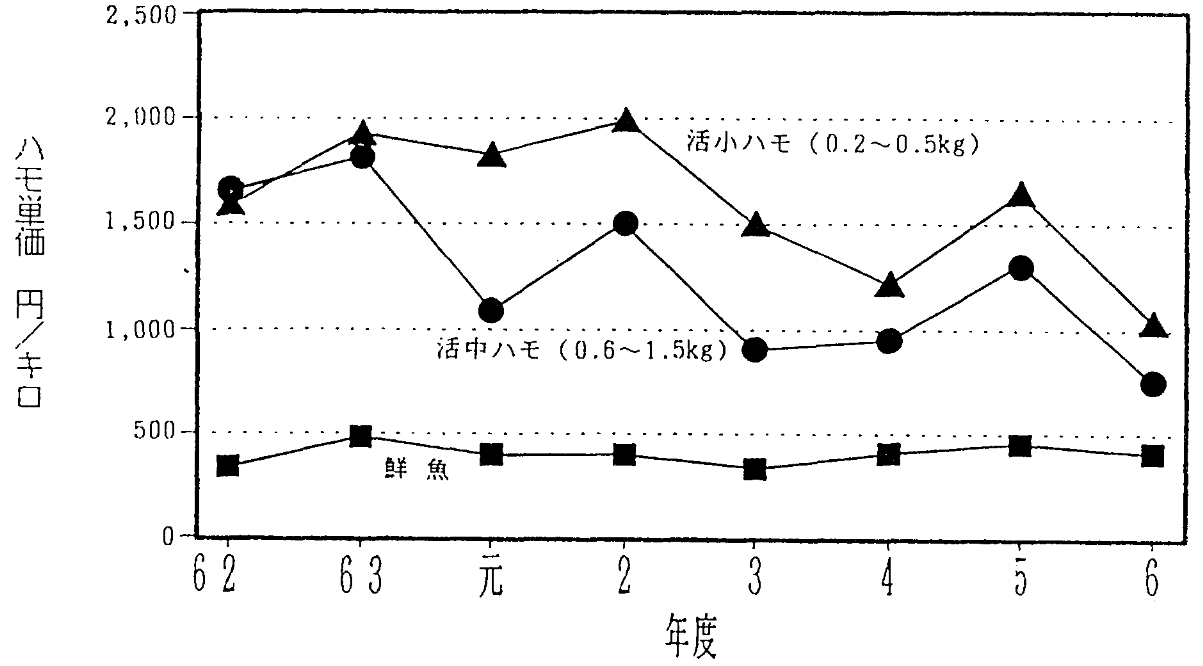


図5 ハモ単価の推移

（平成6年度は4～11月までの平均単価）

表2 ハモ時期（6～11月）における水揚げ実績

		水揚げ量（kg）				水揚げ金額（円）			
年	月	鮮魚	活魚	合計	活魚率	鮮魚	活魚	合計	活魚率
平成4年	6	2.4	9.8	12.2	80.3	2,259	10,105	12,364	81.7
	7	60.9	57.0	117.9	48.3	39,836	66,366	106,202	62.5
	8	28.3	50.4	78.7	64.0	12,404	40,074	52,478	76.4
	9	47.8	88.7	136.5	65.0	9,718	36,484	46,202	79.0
	10	210.0	192.3	402.3	47.8	60,291	149,307	209,598	71.2
	11	127.2	122.4	249.6	49.0	127	27,409	67,370	40.7
	合計	476.6	520.6	997.2	52.2	124,635	329,745	454,380	72.6
年	月	鮮魚	活魚	合計	活魚率	鮮魚	活魚	合計	活魚率
平成5年	6	30.6	27.3	57.9	47.2	29,448	40,150	69,598	57.7
	7	66.1	150.0	216.1	69.4	60,359	348,760	409,119	85.2
	8	23.0	223.1	246.1	90.7	11,713	272,713	284,426	95.9
	9	6.8	40.0	46.8	85.5	1,096	22,958	24,054	95.4
	10	56.0	151.1	207.1	73.0	5,166	47,490	52,656	90.2
	11	25.3	114.4	139.7	81.9	4,168	42,688	46,856	91.1
	合計	207.8	705.9	913.7	77.3	111,950	774,759	886,709	87.4
年	月	鮮魚	活魚	合計	活魚率	鮮魚	活魚	合計	活魚率
平成6年	6	8.1	85.2	93.3	91.3	6,864	105,765	112,629	93.9
	7	88.6	181.8	270.4	67.2	74,750	258,321	333,071	77.6
	8	144.1	287.0	431.1	66.6	30,110	193,683	223,793	86.5
	9	341.1	342.2	683.3	50.1	53,112	122,291	175,403	69.7
	10	73.8	171.9	245.7	70.0	11,586	61,202	72,788	84.1
	11	47.0	115.1	162.1	71.0	15,446	42,834	58,280	73.5
	合計	702.7	1183.2	1885.9	62.7	191,868	784,096	975,964	80.3

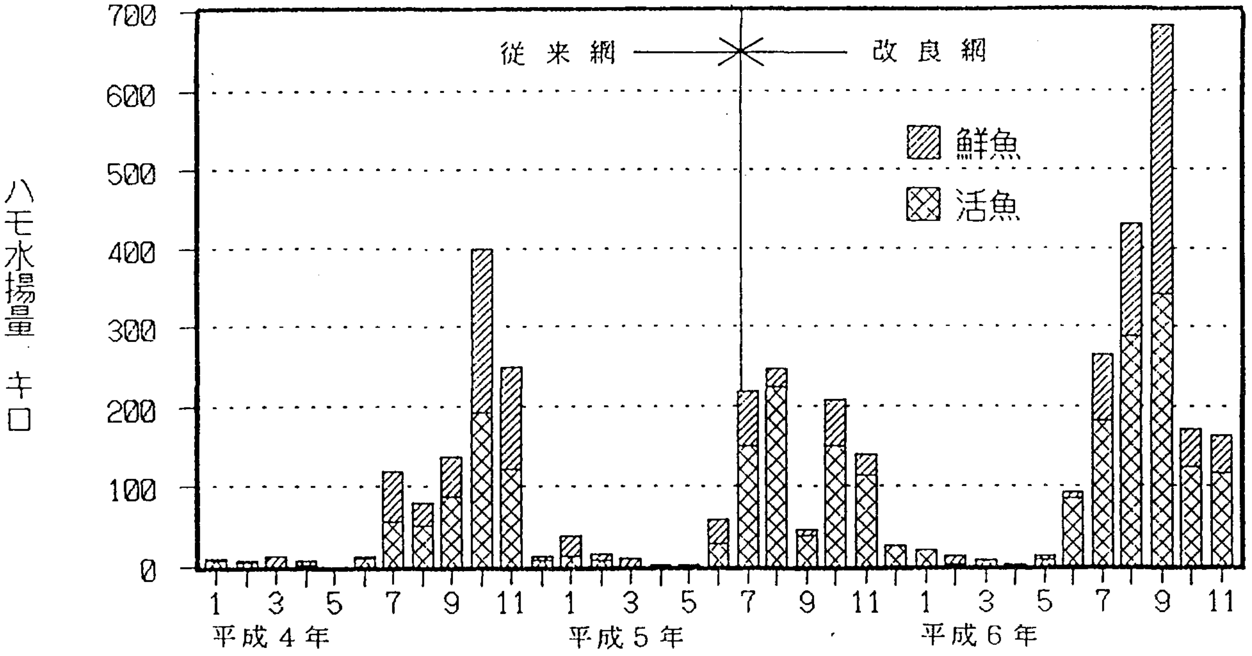


図6　萬吉丸のハモ水揚げ実績
（平成4年1月～6年11月）

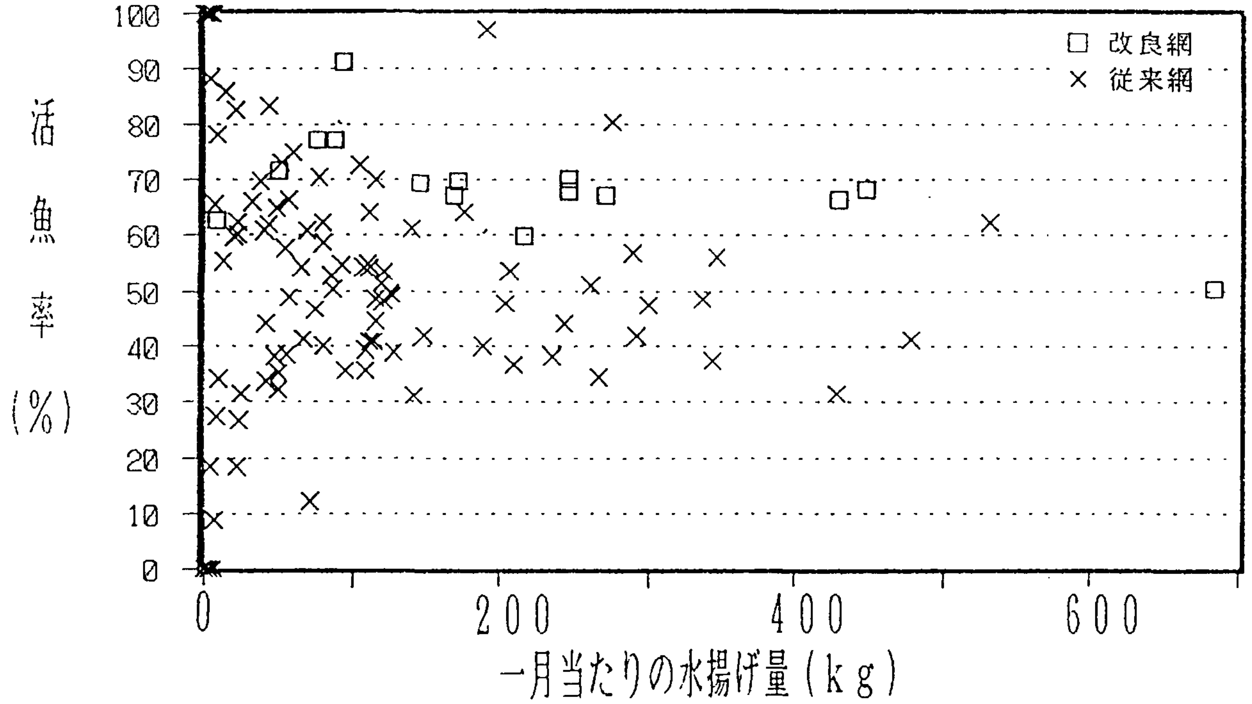


図7　ハモ水揚げ量と活魚率の比較
（平成6年6～10月）

表3　網目拡大の比較試験結果

		12節（従来通り）		8節（網目拡大）		量の比較 8節/12節
水揚した漁獲物	魚種名	量(kg)	金額(円)	量(kg)	金額(円)	
	小エソ	173.0	6,920	120.0	4,800	0.69
	甲イカ	84.6	30,926	61.8	28,195	0.73
	ハマカレイ	20.6	6,539	14.9	5,230	0.72
	キス（大）	10.4	5,355	9.5	5,881	0.91
	キス（小）	6.5	130	2.0	40	0.31
	カマス	7.7	2,348	27.5	9,326	3.57
	エバ	14.9	447	19.5	657	1.31
	タイ	2.2	1,034	4.8	2,250	2.18
	シバ	9.0	999	7.7	595	0.86
	クルマエビ類	1.75	4,148	1.6	3,827	0.91
	アジ仔	15.0	1,400	10.0	2,340	0.67
	トラカニ	8.0	16,768	6.5	9,310	0.81
	その他	38.6	5,667	89.1	14,577	2.31
	合計	392.25	82,681	374.9	87,028	0.96
主な投棄魚		ネズッポ，ヒメジ アオアジ，アナゴ ガンゾウビラメ エソ，ウシノシタ カナガシラ，エバ グチ，小イカ，アジ ヒトデ，タツシロガイ等の貝類，トラフカラッパ等のカニ類		アオアジ，アジ イワシ，ネズッポ ヒメジ，カナガシラ グチ，ウシノシタ エバ，小イカ ヒトデ，タツシロガイ等の貝類，トラフカラッパ等のカニ類		0.77
		約195kg		約150kg		
網目を刺す魚種		ウシノシタ，アナゴ ガンゾウビラメ		エソ，カマス		
選別時間		30分から40分		20分から30分		

試験実施日：平成6年11月21日　　操業回数：4回

1回の曳網時間約4時間

①10時～14時

②14時40分～19時5分

③19時40分～23時30分

④　0時～4時

曳網速度　：2ノット前後

操業場所　：高ℓ沖
水深50m～70m

明日を担う青壮年部活動

名瀬漁協青壮年部　瀧田　和幸

1　地域と漁業の概要

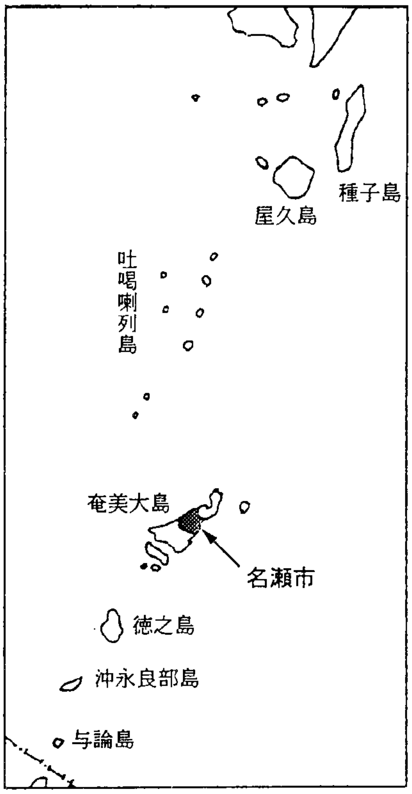
名瀬市は鹿児島から南へ約３８０km離れた洋上にある奄美大島の中央に位置し，北は東シナ海，南は太平洋に面しています。

亜熱帯海洋性の気候で四季を通じ温暖・多湿で，年間　３，０００mmを越える雨が降ります。夏は南，冬は北からの季節風が強く時化の日が続き，漁に影響を及ぼすこともあります。

市の面積は１２８km²，人口は４万５千人で，産業はサービス業・卸売業等の第３次産業の占める割合が多く，古くから群島の拠点都市となっています。

名瀬漁協は組合員４２５名（正組合員１６９名，準組合員２５６名）で，漁業は一本釣りを主体として刺網，延縄，潜水漁業等が営まれています。

平成４年の漁業生産量は　１，１３９トン，生産額は８億９千７百万円で，魚種としては浮魚礁を利用したカツオ・マグロ類等の漁獲が多く，次いでチビキ・ホタ等の瀬物類となっています。



図－１　名瀬市位置図

表－１　漁業生産量・生産額の推移　　（単位：トン：百万円）

年	60	61	62	63	元	2	3	4
生産量	1,534	1,306	910	990	1,274	984	1,126	1,139
生産額	1,058	893	754	692	764	809	877	897

＊資料：大島支庁商工水産課

2　組織及び運営

我々の青壮年部は平成３年４月に発足し，同時に県漁協青年部連合会に加盟しました。これは他の青年部との交流を通し，地域に限定されない広い視野を培うためです。

現在，２７名の部員が所属し，部長１名・副部長２名・書記会計１名・監事１名の他，活動内容等についての助言，相談役として４名の評議員をおき運営しています。

部員は下表のとおりの年齢層で，ほとんどが潜水漁業（ほこ突き）を営んでいます。

年間の活動費は，部費，漁協からの助成金の他，市等から依頼を受けるマダイ放流等の事業活動費でまかなっています。

表－２　部員の年齢構成　　（単位：人）

漁業種類	２０～２９	３０～３９	４０～４９	５０～５５	計
潜　水		４	１０	３	１７
１本釣	１	４	３		８
延　縄		２			２
計	１	１０	１３	３	２７

3　活動の概況

我々の活動の根底には，年長の方々の口から，そして実際自分達でも目にした「ホンダワラ等の海藻が茂り，ガシチが腐るほど採れた海。キビナゴが時期になると湾内に大きな群れとなって入ってきた海。ヤコウガイがイセエビが，等々」昔の豊かな海を，取り戻したい，少なくとも現状より悪くならないようにして後世に残したいという願いがあります。このため「資源の維持と増殖，漁場環境の保全」に力を入れています。

(1) 資源の維持と増殖

ア　マダイ・イシガキダイ放流事業

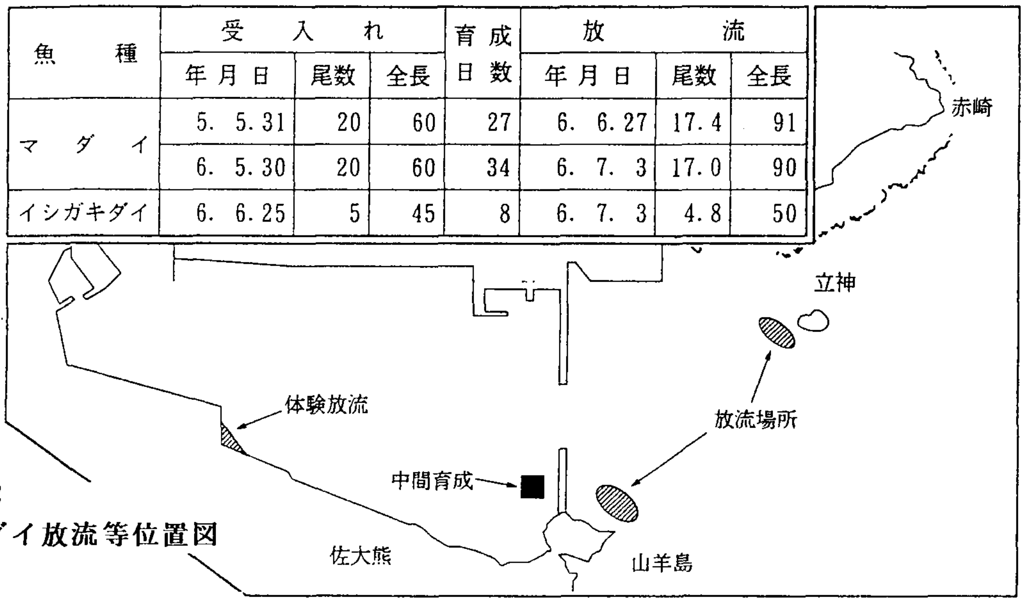
名瀬には適当な湾がなく，マダイを放流しても定着するか疑問があり放流を見送っていました。しかし，漁船漁業の生産量・金額は伸び悩み「獲る漁業」から「つくり育てる漁業」への転換の必要性は高まる一方で，民間の種苗生産施設が設置されるのを機に，市の助成を受け平成５年度からマダイ放流事業を実施することになりました。

５年度は平均全長９１mmのマダイ約１万７千尾を，６年度は９０mmのマダイ約１万７千尾と５０mmのイシガキダイ約５千尾を，名瀬港内に放流しました。放流には次の世代を担う子供達に栽培漁業の必要性を認識してもらいたいと思い，地元の小学生等を招き体験放流を行いました。子供達を始め参加者が喜ぶ様子を見ると，海に親しむ機会を増やすこうした活動は，一般の方々の水産業に対するイメージの向上や後継者育成にもつながっていくのではないかと感じました。

放流の成果はすぐには現れませんが，気持ちは大きく持ち，じっくりと腰を据え，取り組んでいくつもりです。

表－３　マダイ・イシガキダイ中間育成結果　（尾数：千尾，全長：mm）

魚　　種	受入れ			育成日数	放流		
	年月日	尾数	全長		年月日	尾数	全長
マダイ	5. 5.31	20	60	27	6. 6.27	17.4	91
	6. 5.30	20	60	34	6. 7. 3	17.0	90
イシガキダイ	6. 6.25	5	45	8	6. 7. 3	4.8	50



**図－２
マダイ放流等位置図**

イ　放流追跡調査事業

亜熱帯域の栽培漁業確立のため，県が実施されているヤコウガイ等の放流追跡調査に積極的に協力しています。

ヤコウガイは，平成４年３月に崎原地先に平均殻長１８mmと５mmの種苗をそれぞれ６００個と５,０００個，５年１２月に朝仁地先に１５mmの種苗を２,０００個放流し追跡調査を行いました。結果は崎原も朝仁も逸散したのか，食害にあったのか５ヶ月後までに棲息を確認できなくなりました。特に朝仁についてはドロの流入が目立ち，これが何らかの影響を及ぼしたのかも知れません。

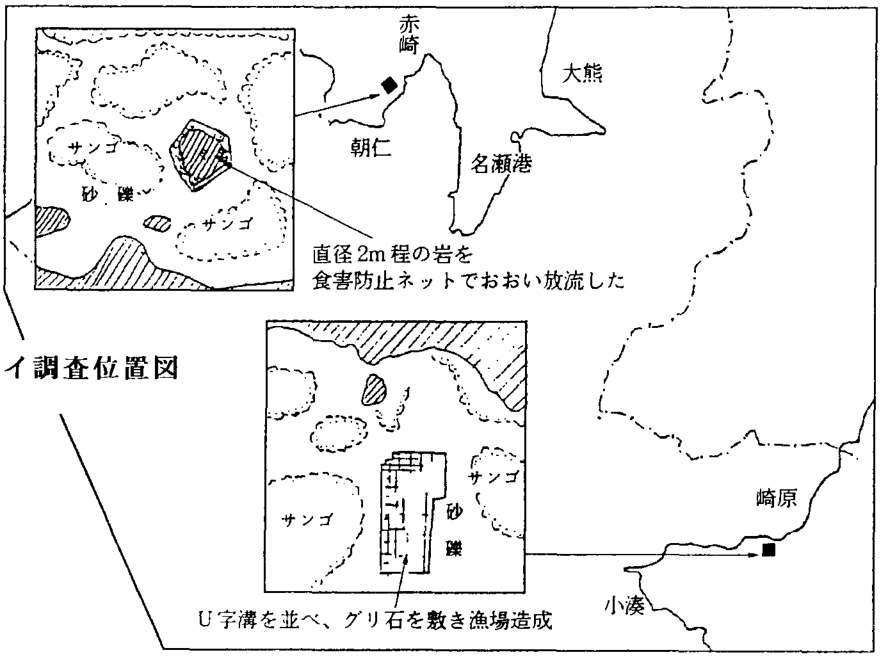
シラヒゲウニは6年8月に名瀬港内の山羊島トンネル前の浜に平均殻径17㎜の種苗を 1,200個放流し，1ヶ月後・2ヶ月後の調査では，それぞれ76個・10個を確認しました。

トコブシは今年6月に崎原地先に平均殻長34㎜の種苗を 7,000個放流し，これから海の状況を見て調査する予定です。

現在までの追跡調査の結果は，満足のいくものではなく心残りですが，歩留まり向上のために，放流種苗の大型化・棲み場の造成・調査場所等について，検討していきたいと思います。

表－4　ヤコウガイ放流追跡調査　（個数：個，殻長：㎜）

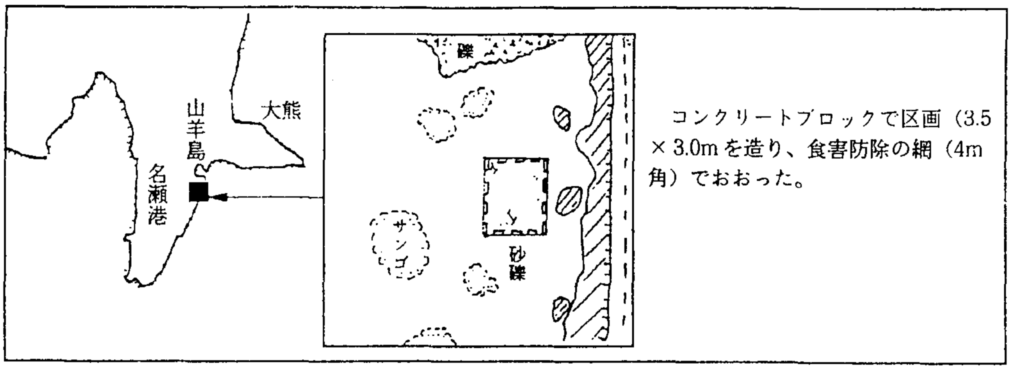
場所	放流			追跡調査(1回目)			追跡調査(2回目)	
	年月日	個数	殻長	年月日	個数	殻長	年月日	個数
崎原	5. 3. 9	600 5,000	18 5	5. 5. 1	10	11～24	5. 8.12	0
朝仁	5.12.15	2,000	15	6. 1. 6	多数の生存		6. 4.11	0



図－3
ヤコウガイ調査位置図

表－5　シラヒゲウニ放流追跡調査　（個数：個，殻径：㎜）

場所	放流			追跡調査（1回目）			追跡調査（2回目）		
	年月日	個数	殻径	年月日	個数	殻径	年月日	個数	殻径
山羊島	6. 8.18	1,200	17	6. 9.20	76	29	6.10.14	10	38



図－4　シラヒゲウニ調査位置図

ウ　イカ類増殖事業

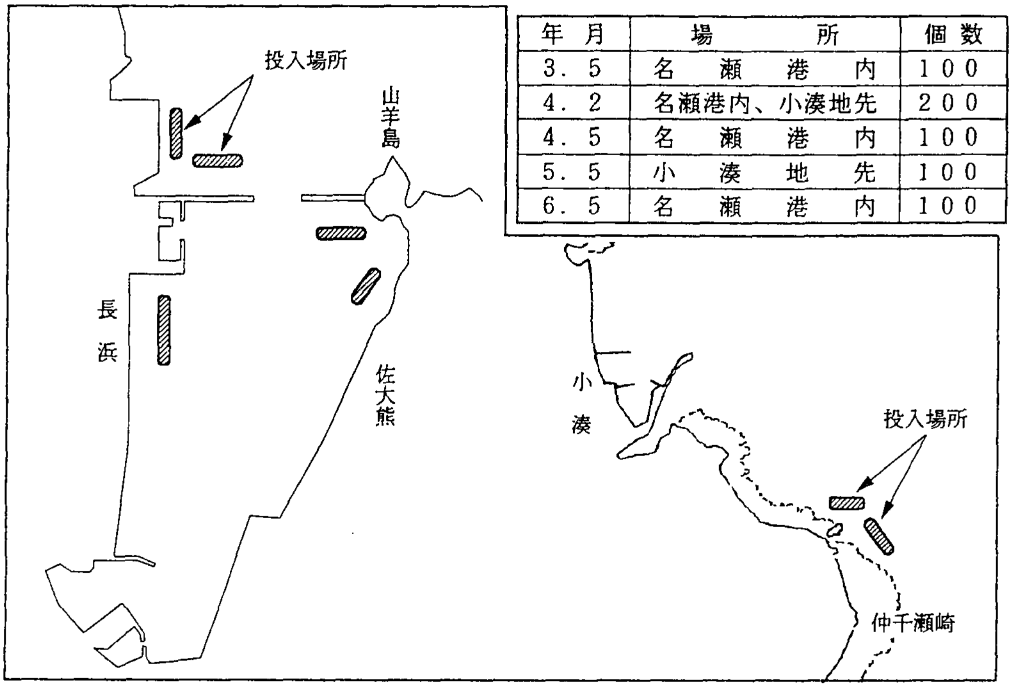
イカ柴の投入はミズイカの産卵場造成と資源保護の目的のため，発足当初から取り組んでいる事業で，これまでに６００個を小湊地先・長浜地先等に投入しています。ほとんどのイカ柴で産卵を確認し「効果は大きい」と考えられますので，毎年続けていく予定です。

また，新しい試みとしてコブシメの産卵床の設置を６年１月と２月に行いました。これは日本栽培漁業協会八重山事業場に視察研修にいった時に教わったもので，自分達の漁業とも関係が深く期待していたのですが，産卵床が流失したり泥を被ったりして，産卵の確認はできませんでした。

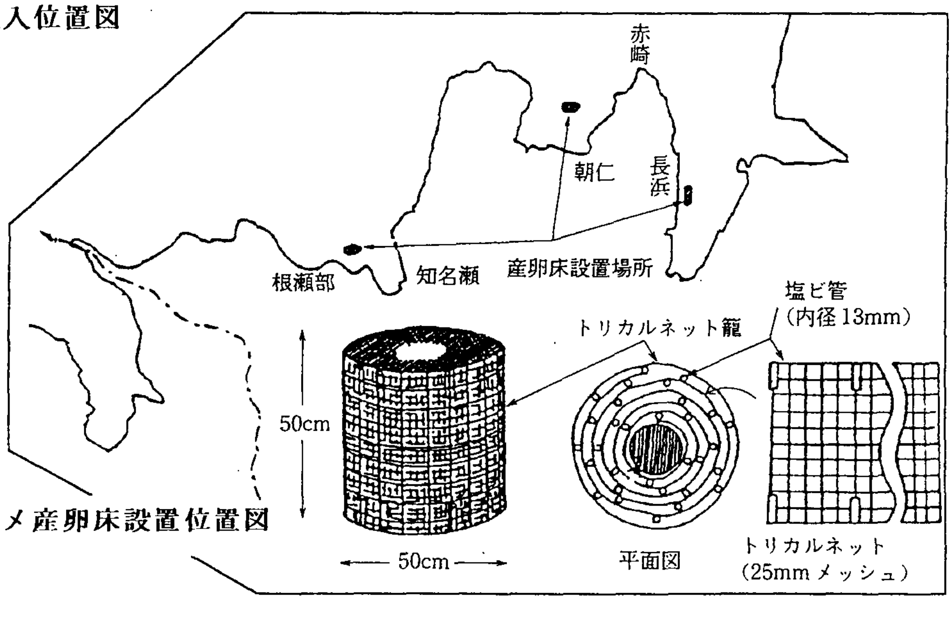
しかし，納得がいかない我々は，「天然で産卵しないのなら水槽の中で産卵させて育てよう」と，名瀬漁協の２階に円型水槽を設置して，コブシメのつがいを入れ産卵試験を試みたのですが，産卵しないうちに死んでしまいました。水質管理等の技術的な問題もあり，我々の力では産卵試験の継続は難しいようですが，産卵床の設置については，沖縄では産卵の報告がありますので，今後も場所を検討しながら設置・調査していきたいと思います。

表－６　イカ柴投入実績

年　月	場　　　所	個　数
3．5	名　瀬　港　内	１００
4．2	名瀬港内、小湊地先	２００
4．5	名　瀬　港　内	１００
5．5	小　湊　地　先	１００
6．5	名　瀬　港　内	１００



図－５　イカ柴投入位置図



図－６　コブシメ産卵床設置位置図

(2) 漁場環境の保全

各種の増殖試験を試みても，受入れる海が汚れていたのでは効果もあがりません。このため月並みですが，漁場環境の保全として，ゴミ箱の設置や海岸清掃に取り組み，また，一般の方の協力も必要なのでマダイ体験放流等の際，児童をはじめ集った方々に周辺の清掃をお願いし，自ら汗をかき作業をしてもらうことで，一層のモラル向上を図っています。一人一人が今より少し注意してくれれば，海は今より綺麗になるはずです。ゴミを拾うことより捨てないことを心掛けたいものです。

以上の他，地域水産業の振興・活性化のため，お魚まつりや産業祭への出店をはじめ奄美祭りの舟漕ぎ競争に出場したり，部員の親睦のためゴルフコンペを開催したりと楽しく活動していますが，関連してふれておきたいことがあります。

それは我々が「手作り集団」であるということです。

部員に調理士，建設・水道の工事技術者等を抱えており，活動後の反省会に出すオカズの調達・調理はもちろん，マダイの中間育成用の生簀，コブシメの産卵床・産卵試験用の水槽，果ては漁協製氷施設外壁の保全修理等まで手掛け，またゴルフコンペの商品にしても飲食店と交渉して，ボトルキープ券やチャージ券を作ったりしています。単に業者に発注するのではなく，出来ることは自分達の手でコツコツ行うのも青壮年部活動の良さではないでしょうか。

4　効果的な活動のために

こうした放流，海岸清掃等の活動や必要性は，単に漁業者だけが実行・認識しても自己満足で終わってしまいます。「放流した魚や貝は漁業者だけが獲るのか？ゴミは漁業者だけが出すのか？」考えていくと，やはり一般の方々が我々の活動を理解し協力くれてこそ，結果がともなってくると思います。

「手間と金を掛けずに我々の活動を広く紹介する方法は？」「マスメディアの活用！」答えは簡単でした。我々が何か活動する際には，新聞社に連絡を入れ取材をお願いし，たとえ担当者が来ていただけない場合でも，写真を提供し紙面に掲載してもらっています。地元紙ではありますが，一面トップを飾ることも度々で，一般への理解を深める効果は大きく，今後も情報を提供していきたいと思います。

5　今後の課題

(1) 自分達の足場を固める

発足から４年目を迎えますが，我々なりにいろんな事に取り組んできました。むしろ，躍起になって活動してきた感もあり，取り込みすぎたような気がします。

当初３１名が団結して活動しようと発足したのですが，現在では部員も減り，しかも行事への参加者が１５名ほどに固定化してきました。無理な活動があったのではと反省もしています。

漁業者は生活の糧を得るため海に出る分，外部との交遊範囲が狭くなりがちです。しかし，青壮年部の活動はいろいろな人との出会い・交流の機会を増やしてくれます。活動の成果を求めることは大切ですが，活動を通して相互の融和を図ること，信頼関係を築いていくことも大切で，全員が参加できるような，また青壮年部に入りたいと思われるような活動を心がけたいと思います。

(2) 地域を越えた活動

他の漁協青年部でも同じでしょうが，我々は市の水産振興対策協議会等の委員，産業祭への参加等「地域に根ざした活動」を心掛けています。しかし我々が強く感じるのは，「奄美群島の地理的な特殊性を考えると，各地域内だけの活動に固執しては，いずれは群島の水産業が廃れてしまうのではないか，地域を越えた活動が必要ではないか」ということです。このため，他の青年部の活動に協力したり，頻繁に交流したり，奄美群島水産振興協議会が主催する「お魚まつり」に率先して参加し，他の青年部と合同出店して，青年部間の連携を図っています。

平成6年2月に群島の若手漁業者が集まり「奄美群島水産青年協議会」を発足させました。これも互いの融和を図り協同意識を向上させる事が，将来の群島水産業の活性化につながるという意識の高まりからです。各々の青年部活動には限界があるため，これまで以上に青年部間の連携を図り，群島全体で協力していけるような体制の確立に努めたいと思います。

(3) これまでの活動を継続していく

地味な活動でもいつかは実る。「継続は力なり」の精神で頑張りたいと思います。

我々は放流や追跡調査の後，また海岸清掃の後と何かにつけ飲む機会を作ります。これは単に労をねぎらう場と言うだけでなく，現在の水産業が抱える問題や疑問，また将来の水産業のあり方や自分の夢を語り会う場でもあります。これからの水産業を担う一番手は我々青壮年部であり，群島のみならず水産業が抱える問題が今後大きくのしかかってくるのも我々に対してです。

これからも大いに飲み，そして語り「明日を担う活動」に取り組んでいきたいと思います。

表－7　平成5年度及び6年度活動実績

年　月　日	活　動　内　容
5．3．6	平成5年度青壮年部通常総会
．9	ヤコウガイ放流　（崎原地先）
．17	ヤコウガイ追跡調査
4．7	漁青連役員会
．23	漁青連通常総会
．26	役員会・コブシメ放流検討会
5．1	イカ柴投入・ヤコウガイ追跡調査
．2	マダイ中間育成イケス準備（13日，19日）
．31	マダイ中間育成開始（山羊島前）
6．27	マダイ体験放流（伊津部小児童）（26日　マダイ標識装着）
7．20	海岸清掃
．22	名瀬市水産振興対策協議会
．28	役員会
．31	奄美まつり　（舟漕ぎ競争）
8．11	海岸清掃
．12	イカシバ・ヤコウガイ追跡調査
．15	密漁監視
．27	組合長と語る会・漁青連役員会
9．30	漁青連役員会
10．1	漁青連ソフトボール大会
．20	役員会・お魚まつり検討会
．31	お魚まつり（30日　会場設営）
12．21	宇検村漁協青年部との交流会
．22	青年部研修会　（宇検村）
6．1．10	海岸清掃用ゴミ箱制作
．12	役員会・コブシメ産卵床作成
．13	コブシメ産卵床設置（第1回目）（25日　産卵床回収）
．28	コブシメ産卵試験　（水槽制作）
2．1	コブシメ産卵床設置（第2回目）（20日　産卵床回収）
．21	コブシメ産卵試験　（水槽設置）
．24	奄美振興研究会協会役員会
．27	名瀬市産業祭出店
．28	平成6年度青壮年部通常総会
3．8	漁青連役員会
．11	コブシメ産卵試験片付け（3日オス，5日メスへい死）
．24	住用村漁協魚礁追跡調査協力
6．4．1	製氷施設保全・修理作業　～2日
．11	ヤコウガイ追跡調査
．13	先進地視察　（出水・阿久根他）
．15	漁青連役員会・10周年記念式典
．25	学習会・漁協ゴルフコンペ
5．6	マダイ中間育成打合せ
．9	マダイ放流事業計画協議
．13	イカ柴準備　14日に投入
．16	マダイ等放流計画協議
．21	奄美群島水産青年協議会役員会
．25	水産技術研修大学(前期)～26日
．30	マダイ等中間育成用生簀組立て
．31	マダイ中間育成開始
6．2	イカ柴追跡調査
．12	港内清掃　（ﾏﾘﾝﾌﾞﾙｰ ｸﾘｰﾝ作戦）
．15	海の記念日実行委員会
．16	観光業界と語る会
．21	トコブシ放流　（崎原地先）
．23	水産技術研修大学(後期)～24日
．24	組合長と語る会
．25	イシガキダイ中間育成開始
7．3	マダイ等体験放流（奄美小児童）（2日　マダイ標識装着）
．5	住用村漁協青年部活動協力～下旬（タイワンガザミ中間育成等）
．6	先進地視察（屋久島・種子島他）
．13	海岸清掃
．20	海の記念日式典参加
8．18	シラヒゲウニ放流
9．1	お魚まつり実行委員会
．18	漁協周辺の一斉清掃
．21	漁青連ソフトボール大会・交流会
．30	奄美群島水産青年協議会役員会及びお魚まつり実行委員会
10．14	シラヒゲウニ追跡調査
．23	奄美群島水産青年協議会総会及びお魚まつり（22日　準備）
．24	奄美群島漁業振興大会
．30	ふれあい祭出店（29日　準日）
11．13	水産青年協議会ソフトボール大会